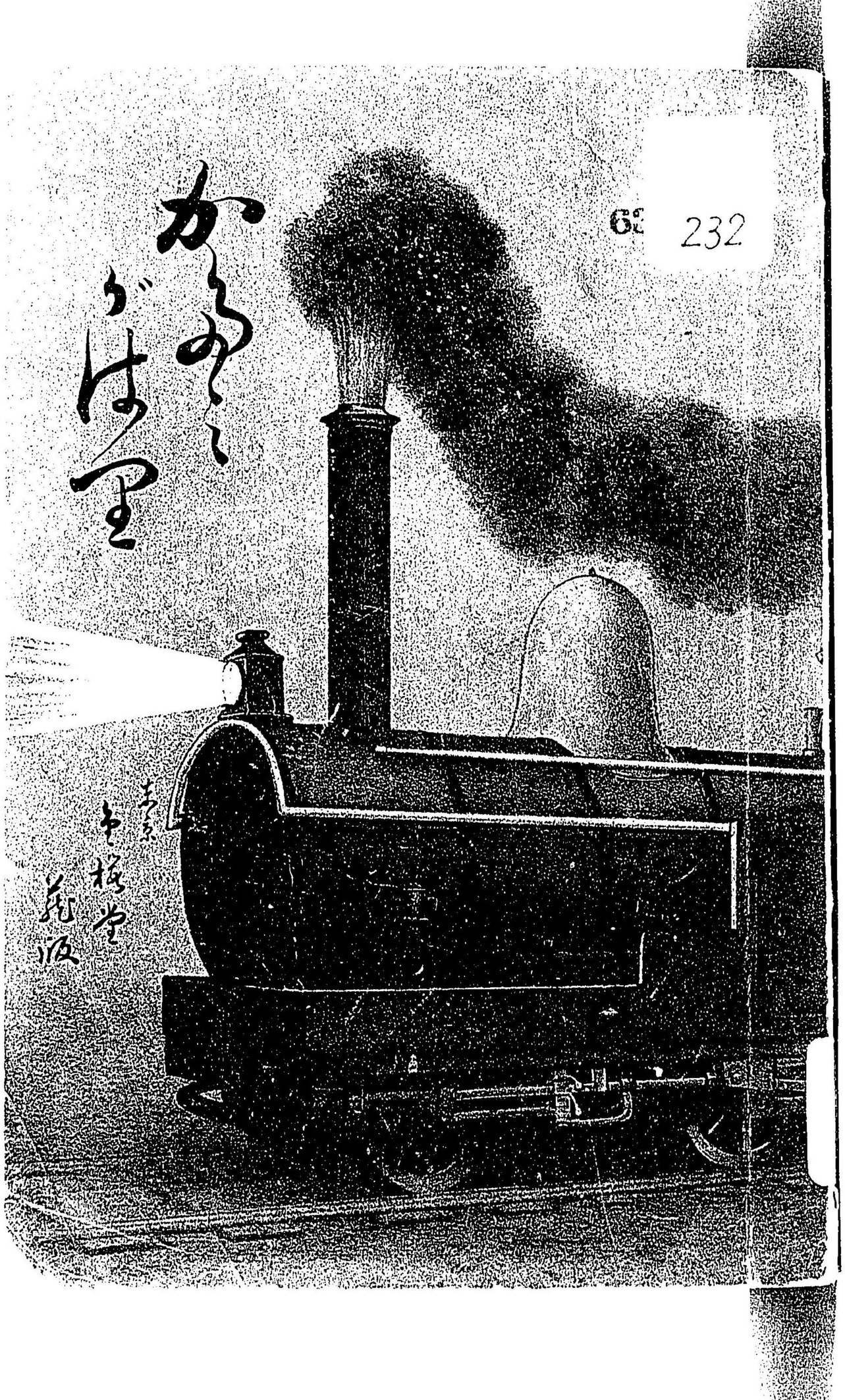
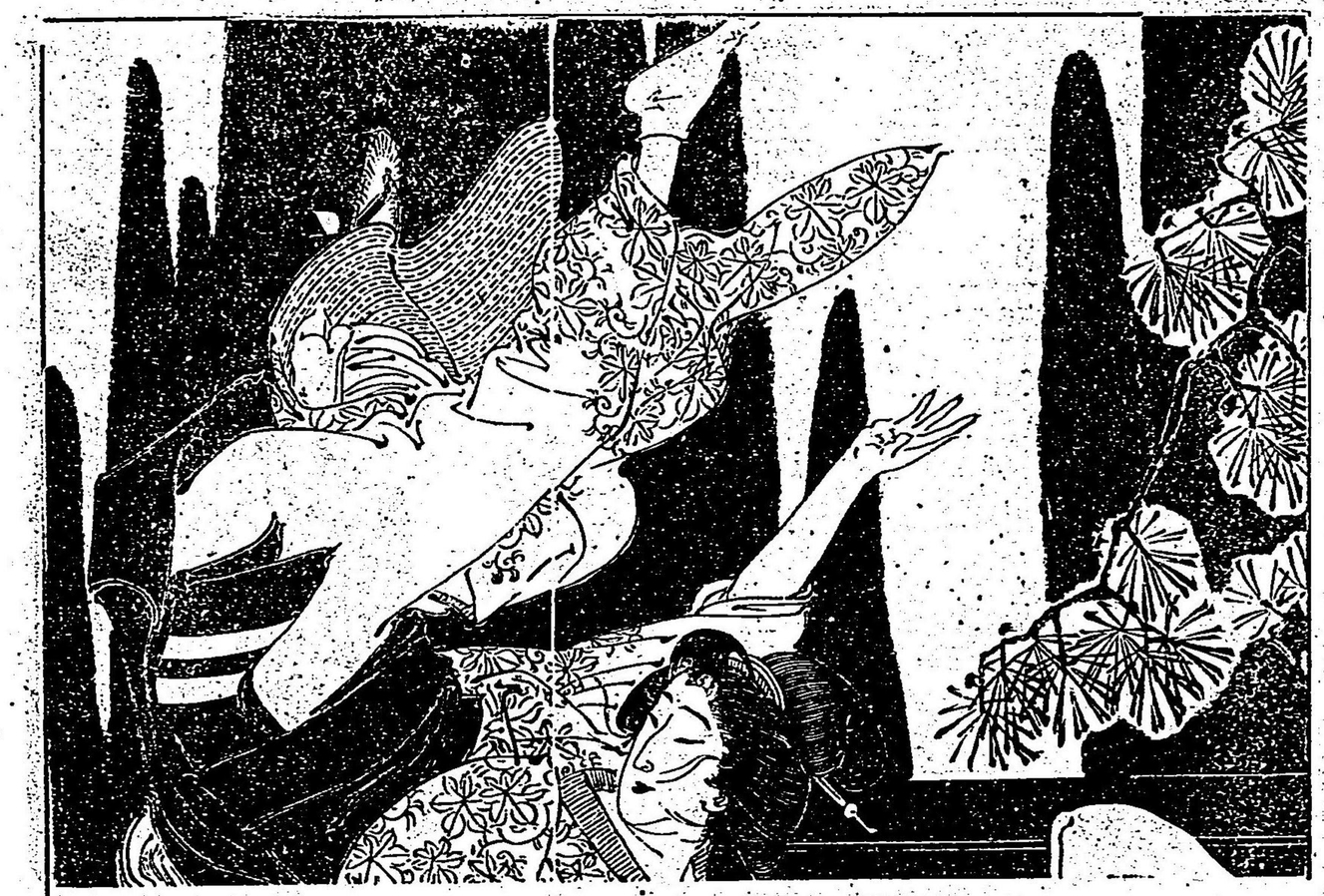
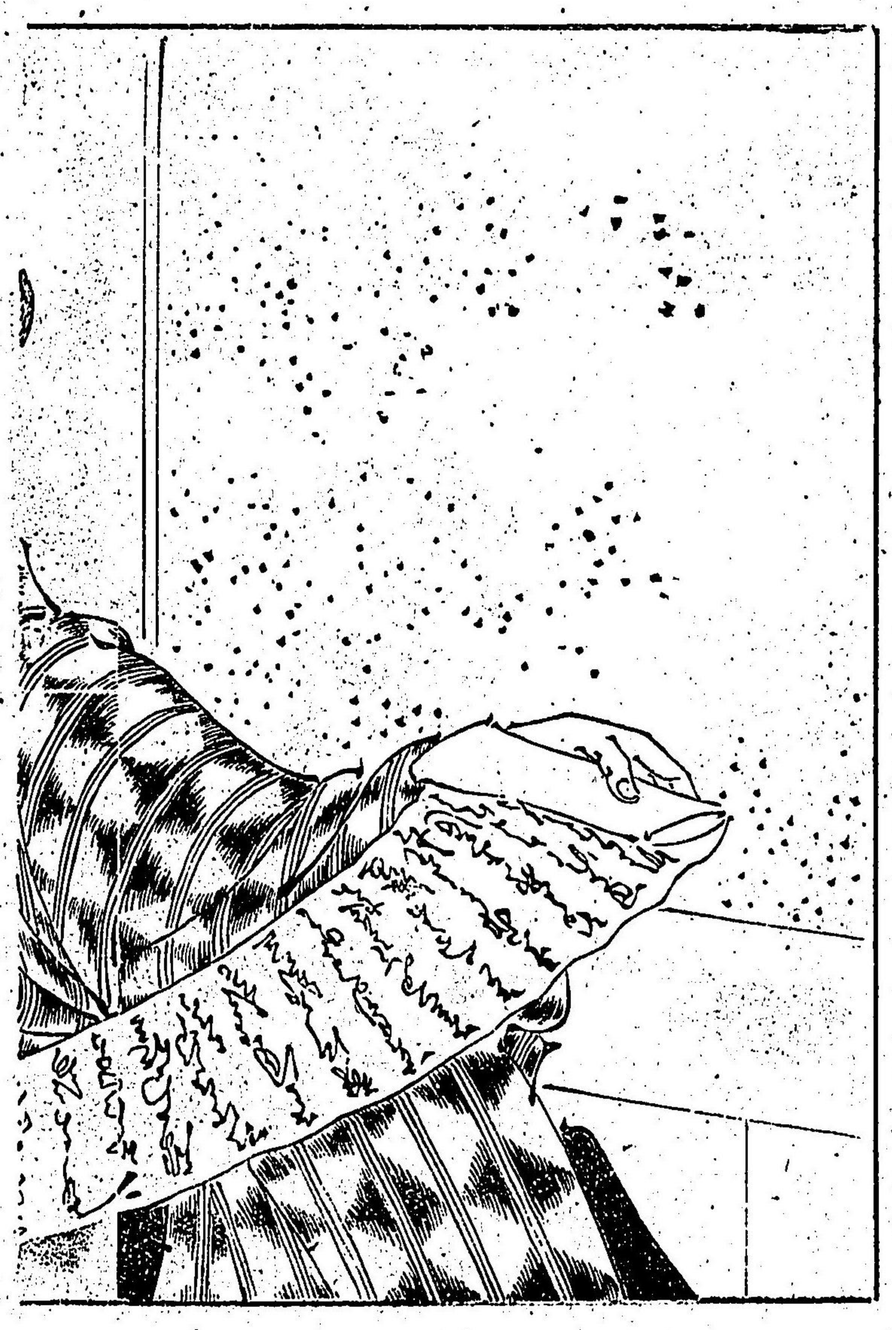


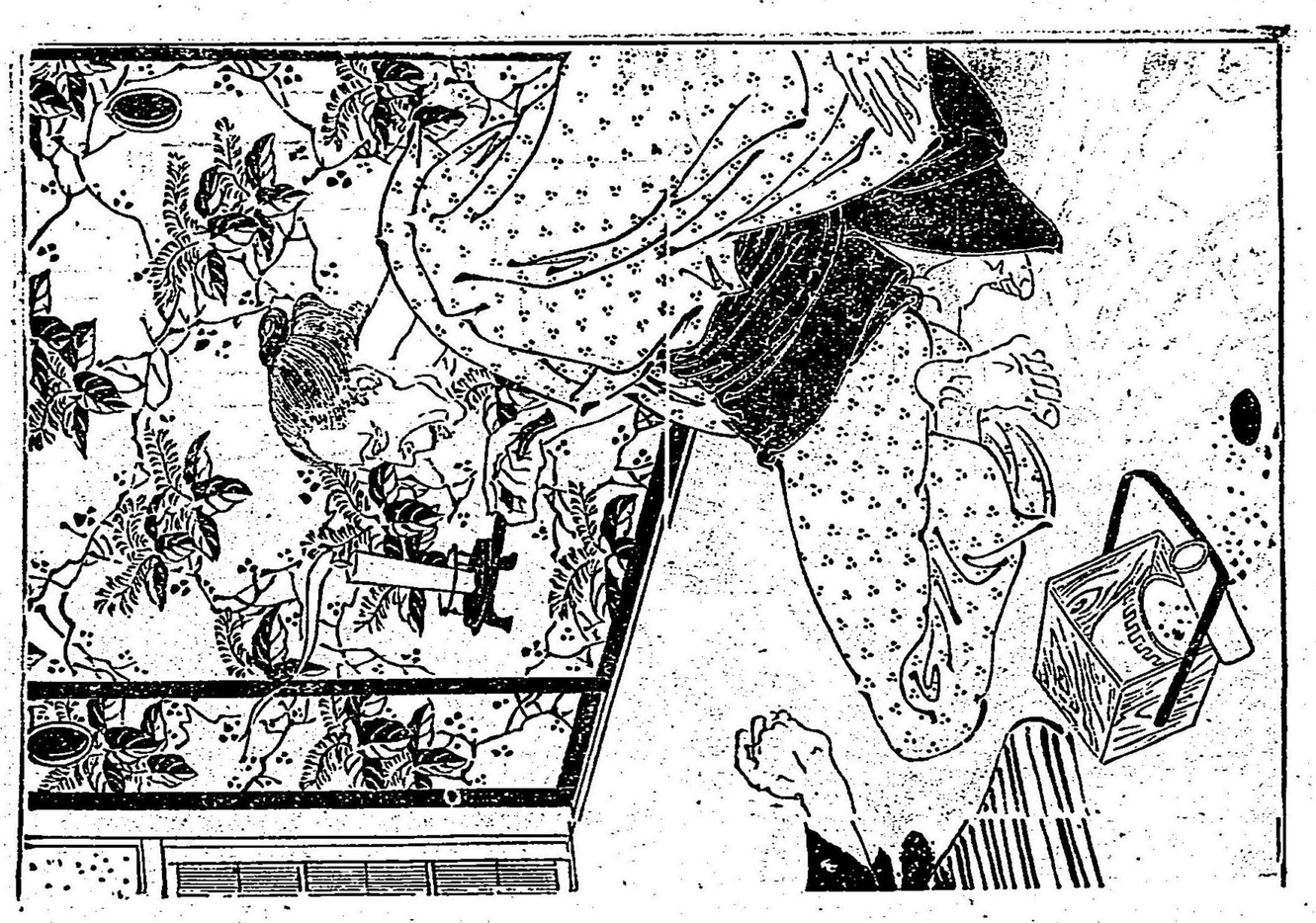
62 232

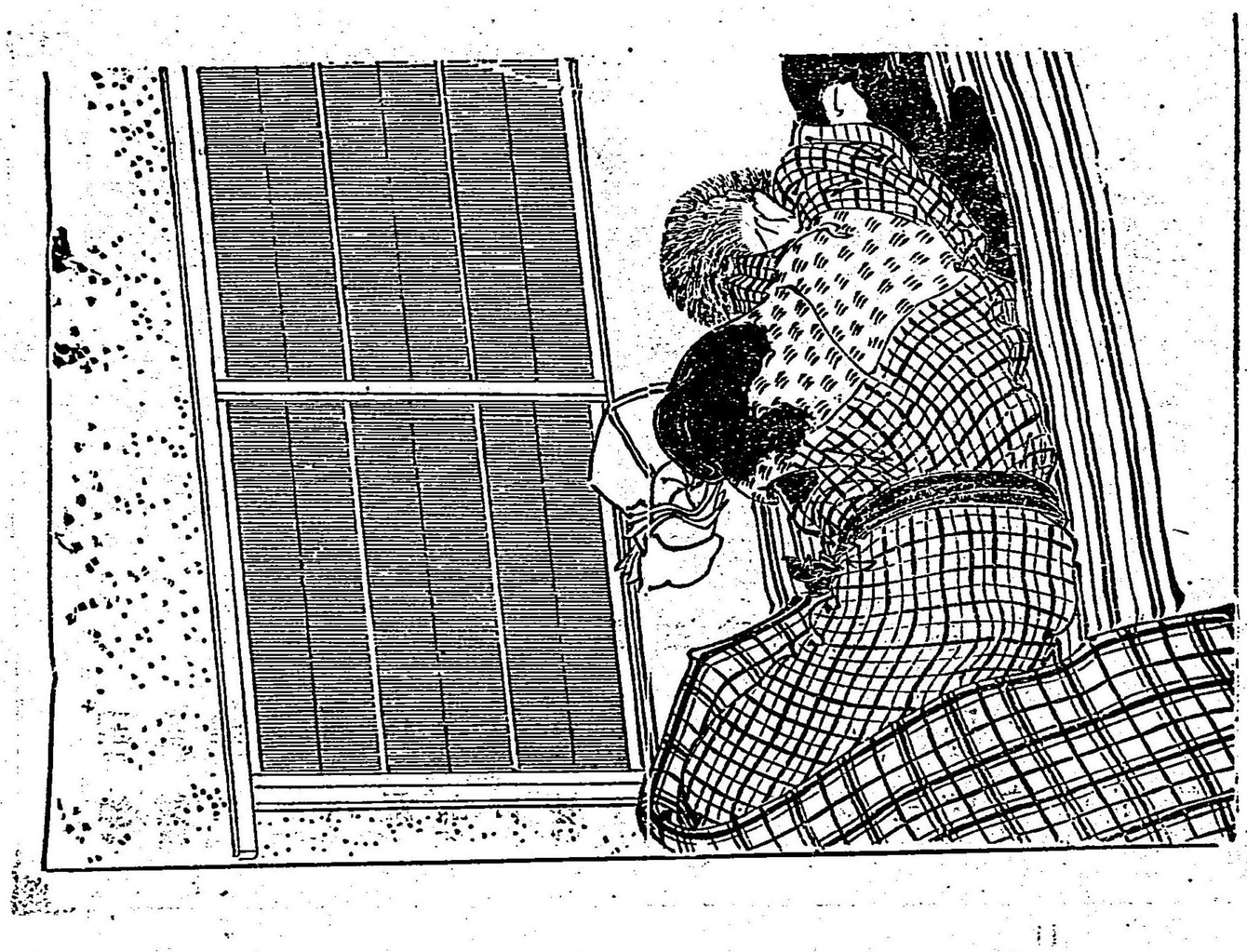
かたみがはり序

春い行ぬ、昨日まで花に忙しかりしも、けふ無聊遣方なし、時鳥待付けん程い、何れ消閑の料おかるべし、予之を今古堂に問堂主人即ち示す小説送がはりを以てす、閲すれば容姿酷肖資性相反の二美人を備ひ來りて、篇中の主賓と出没變幻、讀む者をして五里霧中に彷徨せしむ、其の酷肖に因て事を謀り、又之に因て事を破る處、眞に妙趣向といひつべし、文章い極めて平









特8
232

易談として喝者に水を與ふるが如し、好し予消閑倔僵の書と人先に一本を購へる者い

礫川住　苔花道人

かたみがはり

桃水痴史著

第一回

新橋より東海道に向ふ第二列車發せんとす折から周章狼狽て追來り切符檢査の役人にい見送りと斷り中等車室の人あき處嘯入りし男と女男い帽子を目深に頂き女い肩掛に顔を埋めたるが故容貌仔細に見え判ねども其扮打をもつて察すれば兩人とも年若きるべし追續いて馳來りしい年五十有餘と見ゆる一人の婦人温和ある顔に無量の愛を顯いし二三車室をキョトキョトと窺ひ見る中吏員乘車を促すと急あり既にして此婦人前の男女の乘組みたる車室の前に來るや否や忽ち欣然として

笑み片足車に掛るよと見るまに吏員後より突入るゝが如くにおし戸を閉ぢ合圖の笛吹鳴らせば瀧笛一聲之に答へて列車は進行を始めたり婦人はホット息吻敢へず持ちたる包其處に擲出し彼の年若き婦人の前に坐しお嬢さまと呼掛けながら恭しく一禮すれば若き婦人も肩掛を取除け愛嬌作つて禮を返へせり其狀如何年は十九か二十あるべし身高からず低くからず肉肥過ぎず痩過ぎず涼しき眼元には情滿ち優しき口元には愛嬌溢る、老いたる婦人は額際より流るゝ汗を拭きながら「マア〳〵お嬢さま嘸お待兼でございましたらう、私も乘遲れるかと思つてほんとうに心配致しましたよ全体親類の家の時計が遲れて居た上に車夫がよぼ〳〵して途の捗が行きませんもんですから、アゝ切ない息が切れる、時にお嬢さま私ら怪は何といふ奴で

ございませう、此間逢つた時しみ〳〵異見を致した上へ二三日もすると又貴嬢のお供をして大阪へ參るといふ事は好く左樣申して置いたんでございますよ夫に昨夜參つて見ると夕方から出掛けたと申すこと、貴嬢は泊つても好いと仰しやつて下さいましたが、夫ぢやア勝手過ぎますから鳥渡逢つて歸りませうと待つても〳〵音沙汰あしとう〳〵十二時過るまで待ちましてお歸りませんから寧そ腹の立つたまゝ逢はないで行きませうと荷物を取つて出掛けやうと致したのを親類の者が無理に留めて假令今夜家を明けても明日の朝は屹度歸るから是非鳥渡逢つて過れと喧ましくやしますし、私とても見限つて大阪へは參るものゝ不孝者程可愛いとやらで矢張り逢つて置きたさに一ト晩とう〳〵待ち明かしましたが、マア何でございませう、私が

立ますまで歸らないんでございますよ、もう〳〵愛想が盡果てました何でも親類の話でも近所の藝妓と馴合つていろ〳〵悪い事を致すさうですが、何とマア憎い奴でもございませんか」と言ひつゝ年若き婦人の姿をつく〳〵と打眺め「オヤ貴嬢大層意氣よお粧飾が出來ました事ねへ此御樣子を若旦那へお目に掛たら嘸お喜ぶさいませうほんとうに貴嬢も若旦那を嫌だ〳〵と仰しやいますがあれ程優くて親切で行屆た方もございませんだから大阪ぎも黒人も云ふに及べず近所近邊のお嬢さんぞが大騒ぎを遣つて居ますが其處も又お利口でお堅くて居らつしやいますから滅多に浮いた事もあさいませず是非貴嬢を御新造にしたいと不斷思つて居らつしやつた處へ貴嬢のお母さまの御病氣看病も女に限るッて私を供に連れ早速御上京に

おつてお心盡しの甲斐もおくお母樣も跡々月日が失ありあさいましたが最終の際にも若旦那へ何分頼むと仰しやつたのも即ち貴嬢のお身の事夫から御葬式や跡々の事までも萬端お濟しあすつた頃大阪の御用が出來お先へお歸りおさるに付けても成るたけ早くお家を仕舞ひ貴嬢をお伴れやすやうにと私をお殘しあすつたんでございますが此頃のお手紙では貴嬢のお爲めにお座敷が出來るやら衣服が出來るやら夫も〳〵大變な御用意ださうでございます息吻き敢へず迎立てけるが怪しや相手の若き婦人も兎角の答へさへあさず只管呆惑べる如し此時よ汽車も品川に着きしが此室のみも乘る客もおく又去る客も

おく同じ前の三人を載せて再び汽車も迎轉を始めぬ

汽車の進行を始めし時婦人ゝ又も話しを始め「マアお嬢さま行て居る遊ばせ心齋橋の浪華屋と云へば指折りのお金持ちお藏許りでも五戸前奉公人の二三十人も居て實に大した身代でございます其お家の居新造さまにおゐり遊ばすと何おに好い事か知れません世間でゝ大阪といふと東京に叶ゝないやうに申しますが何致して叶ゝない處ぢやアございません春ゝ櫻の宮の花夏ゝ淀川の涼み秋ゝ北野の萩冬ゝ高津生玉の雪見道頓堀のお芝居に千日前の見世物島渡汽車で行けば京都大津神戸から須磨明石吉野の櫻月ヶ瀬の梅伊勢參宮大和巡りゝお望次第でございますよ貴嬢が行らつしやる處へゝ是非私もお供を致します、ねへ貴嬢お伴れ遊ばして下さいませうねへ」若き婦人ゝいよ〳〵益々當惑の面色にて連れの男の方を顧りみ物言ひ

たげゝ見ゆれども男ゝ汽車に乘るや否や棚床に横ゝり帽子を顏にかし當てゝ快よく眠れる体あり老いたる婦人ゝ尙語を續け「貴嬢おひもじうおゐり遊ばしたならお菓子でも召上れそして少しゝお話しでも遊ばさあいと汽車の中ゝ退屈でいけませんか夫りやもうあすつた事のない旅を遊ばすんですからお心持の好い筈ゝございませんが親公や御兄弟の居らつしやるといふ土地でもおし夫ゝ又何時でもお出遊ばす事ゝ出來ますから左樣お嬢あさるにゝ及びません、夫とも汽車に召してお心持でも悪いんぢやアございませんか、アノ寶丹をさし上げませうか、そんおに默つて居らつしやつてゝ困りますねへ、時ゝ貴嬢あの切符ゝ何おさいましたお失ひあすつてゝいけませんよ私がお預かり申しませう」若き婦人ゝ此に於て漸く花の唇を開き「汽

車に乗遅れまいと思つて少しあめ切符に「マア買はないで行らつしやつたの」大森、大森驛更の聲に老いたる婦人に急ぎ窓に立掛かり「若し鳥渡此處を願ひます」戸の開くを持かねて件んの婦人に汽車を出でしが今まで傍らに臥し居たりし男にむつくり起上りて内よりびつやしり戸を閉せり若き婦人に太く驚き「アラ悪い事を、今の婆さんに又來るんだよ」「靜かにしねへ」「だつて荷物が置いてあるのに乗後れるといけないものを」男に手を振て頻りに制す

老いたる婦人に汽車を下りて彼方此方を彷徨ひ切符賣場を探すと見えしが忽ち汽笛耳を貫く顧みて映然仰天「アレ鳥渡、車せて下さい」呼びながら走り寄る、汽車の窓より半身突出し兩眼涙ぐみたる美人「アレ婆や此處だよもう乗る事に出來ないのか

ね」汽車に美人の問に答へず徐々として進行を始め驛更に窓に縋らんとする前の婦人を此側に「危い、退いたら」

女「アレ御覽あ、お婆さんにまでついて到底汽車に乗り遅れたよ、何だつて締出しおどを喰はすんだね」男「何だつて彼だつて己等ア此位慌いた事アねへ、彼が己のお袋よ」女「ヤヤ左樣かへ」男「逃亡をする途中で親に逢つて堪るものか」女「だが可笑ちやアあいか妾を捉らへてお嬢さまだと、ほんとうに妾に困つたよ氣でも違つて居るのかねへ」男「二三日前逢つた時までにそんな樣子も見えなかつた大方周章て人違ひをんだんだらう」女「いくら周章たつてあんなに間違ふ筈にはいよ」男「間違へりやアこの島屋の娘とだナ」男に獨語のやうに云ふ美人に之を聞咎め女「夫ちやア其の娘さんを大阪へ連れて行くのかへ」男「左樣

よ、お我れ己等を見限り大阪に居る自分の兄哥を便つて厄介にあつて居る中心齋橋の浪華屋といふ金持の家へお針に雇はれ其處の息子の供をして去々月當地へ師へり江島屋の娘のお若といふのを連れて大阪へ行く筈あんだ　女「お母の話ぶりでい男の方が娘に惚れ娘も嫌つて居るらしいがお金もあり男前も好し夫で優しくッて實があるといやア言分もなさゝうなもの何故又娘も嫌ふのかねへ　男「己等ア知らねへ　女「好い女かねに極て居るよ　女「憎しいねへ人を馬鹿にかしであらいよだが若し間違へる程似て居るあら　男「娘のかはりに浪華屋へ乗込みお金があつて男の好い息子と夫婦にありてんだらう　女「何もそんな氣もあいが都合よつたら一ト狂言　男「兎よ角江島屋

の娘を見やう慥か憐に乗つて居るから　女「先刻お母よ聞きかけたのが何だかその娘らしかつたねへ

第三回

草木にも心置くてふ落人あがら汽車の中のさし向ひ着く處へ着くまでも誰に遠慮も憚もあし　男「時に汝何して金を拵せへたんだ」女も男の顔を見詰め嫣然として一笑し　女「當てゝ伊覽ナ　男「當てゝ見ナ、左樣よあア例の田舍大盡をねたつたか　女「あの客嗇奴が手に合ふものかねへ　男「ちやア彼の議員を抱込んだらう　女「違ふよ、彼の人も元いちよい〳〵小遣位にあつたか選擧とやらでお金をおくして今ぢやアちつとも持てやアしあい　男「初心で生意氣お息子様を搦り花牌を勸めて卷上げたが　女「今時そんな海のろい息子様があるものかね　男「ハヽア

解かつた赤襟を旦那より取つたお　女「否だよそんな所爲いしやアしない　男「夫ぢやア何だ　女「當るまいねへ　男「餘り口が多いから見當が付かねへ　女「實い盗賊　男「エ、」顔色變へて四方を見廻し膝かし進めて小聲にあり　男「ほんとうか　女「何だねへ喫驚してサ」男「いいよ〳〵聲を密め　男「全体何して　女「おんだとへ　男「誰のを　女「もつと大きな聲でお云ひなさ外の人が居やアしまいし　男「ヤア何だつて盗賊あぞを　女「フン何だつて約束通り逃げたいからサ　男「思切つた事を遣付けたなア、全体何處で何を盗んだ　女「アレお前さんも知てる通昨日江東にお約束があつたのサ　男「ムヽ、送別會の大一座か　女「彼の崩れが二三人待合の金波亭へ行つて私にも跡口が掛つたから十二時過まで大騒ぎをしたが一座の中今度洋行をする室津とかい

ふ人がお酒の弱いのを強られて大層酔ぱらひとう〳〵下座敷よ打倒れて仕舞つたのさすると外の客人が是非とも妾に介抱をして遣れといふから仕方なしに下座敷へ行て　男「何をした　女「介抱したのさ　男「ヘン旨くいふせ　女「何だねへ、怪らしいへいれけにおつて生体もない位酔つて居たんだよ、介抱をして居る中歸る客人が歸へり泊る客人が寝て仕舞つて何處も彼處も寝とおつた時妾が歸らうと思つて客人を起したがおか〳〵寝込んで起きないのさ、ヤア彼處の家だつて好い氣ぢやアないか妾が胸も聞かないで泊るやうにしたりしてさ　男「例が例だからよ　女「生ぜッかへさずに聞いてお呉れ、妾が獨りぼんやりして居ると床の間へ草匣と時計が置いてあるから急に變な氣持がおつて鈴と草匣の中を開と百圓束の紙幣が三〳〵りア、

是丈お金があると衆さんと約束通り東京を逃亡して何處へでも行かれるかと思つたらどうも〳〵欲くつて堪らないから其お金をもつて直に逃出し家へ歸ると恰度幸ひお前さんが待て居たから委しい話しをする間もなく車で新橋まで飛ばし水天宮へお參をするとてまかしお前さんを連れ出したのさ　男「左樣か」太息をつきつゝ答ふ　女「色戀ゆゑとゝ云ひながら盗賊をしたと聞いて俄に變想が盡たのかへ　男「ナーニ左樣ぢやアねへが隨分危へ事をすると已等ア汗を流して聞いて居たのさ　女「夫程までに惚ふ妾見捨るとやかましいよ　男「ヘンまたお樣を始めたぜ

春の天滄渡り東風徐ろに吹きて岸の柳を梳づれば波靜かゝ霞たゞびきて海の面ゝむら磨の鏡をふせしに異あらず斯る眺め

ゝありながら二人ゝ之に目もくれず何何事をか語合ふ程に汽車ゝ早横濱に着けり

美人ゝ先の老いたる婦人が携へる荷物を携へ若く皇車室を出去りぬ

第四回

同伴よ別れて立出し美人ゝ直隣りなる客車の戸をおし室内を覗ひしが此處よゝ唯一人の美人乘れり渠ゝ室の片隅よ坐を占めたるが其年齢と云ひ貌容窓外の美人と瓜を二つ若し島田を彼の如く意氣に結かへ衣服の着振り派出あらしめば孰れが夫と分き難かるべし窓外の美人ゝ之を見て獨り合點き直ちに此室へ入來りし時汽車ゝ横濱を發したり新參の美人ゝ馴々しく「貴嬢ゝ江島屋の滅さんで入らつしやいませうねへ」と問へば相

手の美人も一礼あし「ハイ江島屋の娘勝でございます貴嬢ゝ何處の方でしたかッイお見それヤしまして「ナニね妾ゝ柳橋の藝妓で小初とヤす者ですが今度大阪まで參らうと思つて直此お隣りに乘つて居たんでございます、而するとお婆さんの方が入らつしやいまして妾が事をお嬢さま〳〵と仰しやるんですよ何でも貴嬢と妾をお間違へあすつたと見えて貴嬢のお家には不幸のあつた事から貴嬢が大阪の浪華屋さんへ行つしやる事まで皆お妾にお話あさるんで何あに妾ゝ困ましたらう其の中大森の停車場まで參ると鳥渡小便へ行くといつて汽車をお下りあすつた限りとう〳〵乘後れてお仕舞ひあさいましたが何でも江島屋のお嬢さんが乘つて居らつしやるに違ひあいかゝ探し出してお婆さんの荷物をお渡しヤしたいと是れまで持つ

てまゐりました」お藤ゝ小初が話しの中も絶えず貌容に眼を付け居りしが此に至りてみつと笑ひ「オヤ左樣でございましねかお前さんを妾と間違へてはんとうにそゝつかしい」ですが間違へるのも無理ぢやアありません鳥渡あの硝子窓に顔を映して御覽あさい、ソレ妾も映しますから何でせうヤア好く似たといつてもこんなに似るのゝ不思議ですねへ」兩人相並んで坐し窓の硝子に姿を映せバ熟れか我と疑ふばかり似たとゝ思か一身兩影餘りの事の怪しさに眉顰むれバ夫も似たり思ゝず笑へバ是も似たり「ほんに是でゝ間違へますねへ」是程好く似て居りながら貴嬢ゝ立派なお嬢さま妾ゝ賤しい藝妓是でも人相見が見ましたなら貴嬢にゝ幸福があつて妾ゝ不仕合が附いて居るんでございませう「オヤ何故妾が幸福でせう兩親ゝ別れて

仕舞ひ住馴れた東京で暮す譯にも行かぬい身の上、藝妓衆あぞの話を聞くとほんとうに羨ましくてありません「ヤア貴嬢飛んでもない事を、仰やるよ妾ども程果敢ないものゝどざいませんあぞれ結構なお家へお嫁にお出あさいまして何あに樂だか知れません」お藤ゝ思ゝずほろりと落す涙を袖におし拭ひ婆やがお話しをしたとあれば置す事もありませんが其の嫁に貰はれるのが何より妾の不仕合です「だつて大阪の浪華屋さんゝ土地で名題のお金持ち其の上男が好くてお優しくて言分のないお方ですとあのお婆さんが仰しやつていしたもの「假令どんなお家であつても嫁にあるのゝ飽まで嫌す」思ず力を入れて云へば小初不審の趣にて「何故貴嬢お嫌あんです」問返されて顔を赤らめ「何故でも」小初ゝお藤が口よりして此の說明かしを聞かんと

望まず寧ろ其の顏を見て答へを得んと試み居りしが稍あつてにつこと笑ひ「貴嬢がお嫌ひあさる譯を妾ゝ好く知つて居ます「オヤ何故」「ナしませうか、ねへ有るんでせう、外にあの可愛い方が「アラ左樣ぢやアありませんよ、違ひますよ」口ゝ否を答へたれど顏ゝ正に然りと答へぬ小初ゝ之を聞いて歎息し「若しも妾が貴嬢あら大喜びで參りませうに「若しも妾がお前さんあら嫌あ處へ行かあいでも濟むものを「まゝにならぬ浮世ですねへ」横濱より箱根に至るまでゝ遊浴ゝ出立つを見ゆる夫婦の乘客と車室を同じうしたる爲め二人ゝ話を妨げられしが絕えず夫婦ゝ相私語てその酷肖を怪み居たりぬ、二名の美人ゝ此間深き思ひに沈みしが汽車箱根を發し再び元のさし向とありし時小初ゝ笑つてお藤に對し「好く〳〵貴嬢と妾とゝ似て居るものと

見ますねへ「ほんとうに不思議です是ぢやア妾が貴嬢にあつても知つてゐありますまいよ」「妾がお前さんにあつても知おいでせうか」「そりやアもう大丈夫です」お藤ハ稍暫の思案の後「あの藝妓衆にあるどとい隠分六ケしいものでせうねへ」「オヤまた妙な事をお聞きあさるねへ」小初ハ笑ひながら答へたりお藤ハ吃度容を改め「根が不器用だから何せ旨くハありませんが三味線も一ト通りハ弾ける積りです」「夫から譯もない事でナーニ今時の藝妓ハ三味線ハ弾けないでも花でも弾ると淨山あんです」「妾で藝妓が勤まりませうか」「勤まりますとも大勤まり」「左樣ですかねへ」再びお藤ハ思案に暮れたり

第五回

街道一の繁華の地名古屋の旅館對城軒の裏座敷に宿れる客い

年の齢二十七八色ハ稍黒けれど眼明らかに眉秀で唇赤く頬髟青く笑へバ無限の愛嬌あり怒れバ充分の凄味見えて實に男らしき男あり是ぞ新橋より横濱まで柳橋の藝妓小初と同車したる者あるが贈に向つて早三時間給仕の女中に酌を取らせてチビリ〳〵酒を呑み問ひもせぬ朝立の客の噂短夜の喞言是れ皆女中が遠廻はしに食餌を促がす謎ありとハ知るや知らずや愚にも付ぬ土地の言葉癖を喞り抔して獨り樂しむ跡引上戸「オイ姉さん頓てお飯よ取掛るからもう少し辛抱頼むよ」給仕の盈を顔におし當て欠伸交りの怪しき聲にて「何ぞヤア御誂り」「あんだ御誂りもねへもんだ姉さんハ先刻から時計の撥バかり勘定して居るが己等ア又姉さんが欠伸の撥を勘定したら慥かに二三百ハ出たやうだハハ、時に大層奇麗なのが二階座敷に居る

ちやアねへか「ハイお出おさいますよ」「ありや何だらう」「一人ゐ何處そのお嬢ささ今一人ゐ東京の藝妓衆だと申しますがマアマア似といつてもあんまに似た人ゐでございません何でも双兒といふ噂です、先刻お湯に入る時二人ともお揃ひに旅宿の浴衣を着ましたが夫こそ孰が孰だかさつぱり見分けが付きませんでした」「妙な似た人もあるんだな、而して唯た二人きりだね」「左樣ですよ」「オット話に實が入つて肝腎の酒が冷たくなつた姉さん後生だ少し燗めて來て貰ひてへ其代ゐり是れッ限りで直に跡ゐお飯にするから」

女中が銚子を持ち不承々々に立出し跡廊下の方よりあまめきし聲にて「東京から入らつしやいました兼吉さんと仰しやる方ゐ此方さまでございますか」と云ひつゝ靜寂に障子を開けば「ハ

イ手前でと答へながら入來りし美人の姿をつく〴〵と打眺め兼吉急に膝立直す、美人ゐ四方を見廻はしてにつこり笑ひ「何だねへお嬢さんと見えるか〳〵」「矢張汝か、今も女中が双兒だらうと噂をする程似て居て見ると滅多よゐ口も利れず、夫に嶋田の樣子から衣裝の具合が違つて居るから已ア全くのお嬢さんと思つた」「お嬢さんだよお嬢さんに相違ないから粗匆お事でもお云ひでないよ」「その衣服ゐ何したんだ」「妾のさ」「髪ゐいつ結かへた」「唯た今」「も少し先き小便に行つた時までゐ髪も衣服も元の通りだつた」「夫が江島屋のお嬢さんだよ」「エヽ彼が江島屋の娘お藤か、驚いた已等ア全く汝と思つて危く聲を掛けやうとした也」「氣をお付けよ若し間違へて露顯すると旨く狂言が出來ないから」「狂言たア何だ」「あの娘ゐ何處までも浪華屋へ行く事を嫌がるんだよ

其處で旨く話をして妾が彼の人の替玉になり又あの人が妾のかへ玉取つがへとをしたんだねへ「夫ちやア何が汝が江島屋のお嬢さんで浪華屋へ嫁に行きお藤さんが柳ばしの藝妓小初で己等と二人逃亡をするといふのか」美人い習し物をも云いず最も優しく美しき眼付にて筆吉が顔をじつと睨め「今一度いつて呉れ」「己等よりかへ玉の藝妓小初をおつ付て汝い浪華屋へ行く氣だらう」「お氣の毒さま左樣いありません」「夫ちやア己等ア此蜂取らず此處まで送つてお暇か」「愛想の盡きた妾を棄てまだ手入らずのお嬢さんを代はりにお取りといつたから其方の割い宜からうが左樣い問屋で卸さおいよ」「馬鹿アいひねへ己等だつて人形も宜しくといふやうな處女と今柳ばしで五本の指に折られる汝と取つ代へちやア差引餘程損をするんだ」「へン旨くいふ

が内々喜んで居る癖よ」「喜ぶものか」「喜んでも祈つてもマア左樣いいかおいよ」「夫ちやア何ずるんだ」「折から廊下に女中の足音美い人い慌て部屋を出おから」「まだ話しが殘つて居るから跡で小便に立ておくれ」

第六回

十日あまりの月影い早西に傾きたり大阪梅田の停車場より汽車より下り話しおがら大川傳ひに浪華橋へさしかゝりしい一人の藝妓と一人の娘「妾の親の宅いもう此處から僅です、昨夜もお話し申した通り病氣といふ手紙が來たから親方に閑を貰ひ歸つて來たとお話しおされば夫で宜しいのでございます、若又面倒お事でも尋ねましたら去年長煩ひをした後兎角物忘れする位お事でございますよ、妾の方い六兵衛といつて

今年六十よある老爺が一人夫れも元ゝ南に居て今ゝ若松町の裏店に貧乏暮らしをして居ますから誰も出入をする者ゝあしゝ妾にした處が早く東京へ行つたんですから大阪の事ゝさつぱり分りません」「夫だけお話しを聞いて置くと何にか行かぬ事もあいでせうお父さんの病氣ゝ必らずお案じに及びません、妾が出來るだけお扱ひ申します兩親を失つて心細いと思ふ處へ一人のお父さんを見附ましてこんお嬉しい事ゝありません」「アラ否ですよそんおよお喜おさるやうお爺父でゝありませんよ尤もねへ人の好い事おら無類飛切です、マア妾とした事が自分の内のお話し許しして此方の分ゝ伺ひませんでしたねへ」「妾が兩親の俗名戒名生れた年月死んだ月日其外江島屋の家筋ゝ此荷物の中ゝ系圖が入れてありますから夫を見ると好く分ります、

浪華屋の隱居幸右衛門といふ人ゝ妾が母の兄であつて今の主人の幸吉ゝ妾が從兄に當りますが東京の方の親類ゝ皆お死んで仕舞つて話の出るやうお者ゝありません、妾を貰ひたいといふ話の始まつた事ゝ一昨年の秋で、母からゝ何と返事をしたか知ませんが妾ゝ否といつたんです、先頃幸吉が參つた時ゝ西陣織を土產に呉れました其織物ゝ外の荷物と一緒ゝ先へ送つてありますす又歸る時此方からゝ母が遺物として衣服を五品遺りましたゝ叔父の幸右衛門ゝ中氣が起つてもう五六年も體が利ません先年東京へ親子連れで來ました時ゝ恰と妾が十三の春で三月許り妾の家へ逗留して居ます間ゝ妾と母と四人連立つて一週間程日光へ行きました其時の話があると中禪寺から戻り途狹が出るといつて皆おに怖かされ大層妾がとはがつた事を

叔父が話して笑ひませう、夫から島原の芝居見に行きました其の時の芝居ハ慥か高橋お傳といふ悪い女の狂言でした歸りにハ蕎美屋とかいふ料理屋へ立寄つて皆お汚飯を喰べました、妾の家のお寺ハ天王寺です、妾ハ種痘を四度しました誕生ハ三月二日お節句の前の日です、學校ハ小學校を卒業してから芳桂女學校へ入つて高等の學課を習ひかけましたが何だか女生徒の風儀が悪いといつて卒業前に引かされました琴や三味線の師匠ハ幾たびも變つて是と連續した處もありませんです、叔父が先年參つた時ハ慥か長唄を習つて居る頃で何か彈かされた事もあつたやうです、妾が持つて居ますものハ浪華屋へ着いた上荷物を解て御覽にあると分ります其の内母が紀念の衣類が箱笥一つあうますから若しお前さんがお着あさらおいでも何卒

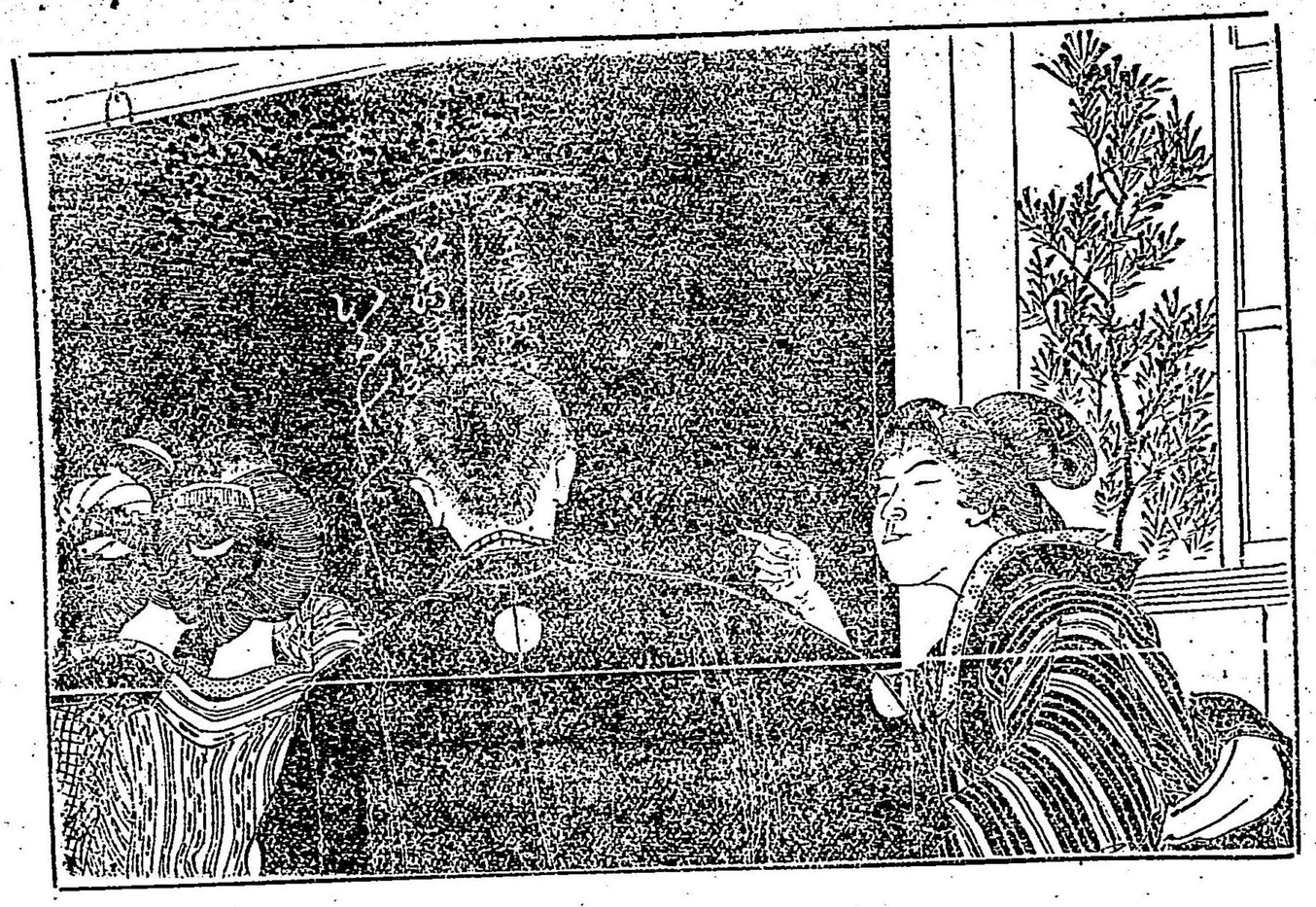
夫だけハ大切にあすつて、もう外に申して置く事ハありません でせうか」往來の人の足と共に話も杜切れがちなれど思出し思出し今ハ大方語盡り斯る程に月ハ俄かに雲に包まれて川風太く吹起り更行くまゝに寒さへいや増ばいつ迄此處に留らんやうおく美人ハ名殘を惜しみつゝ今南北に別れんとす此時忽ち疾風の如く馳來りし一人の曲者壁をもかけず突進して矢庭に美人の一人を橋の上より衝落しパッと立ちたる水烟雲か霞か消るが如く行方も知れず逃失せたり

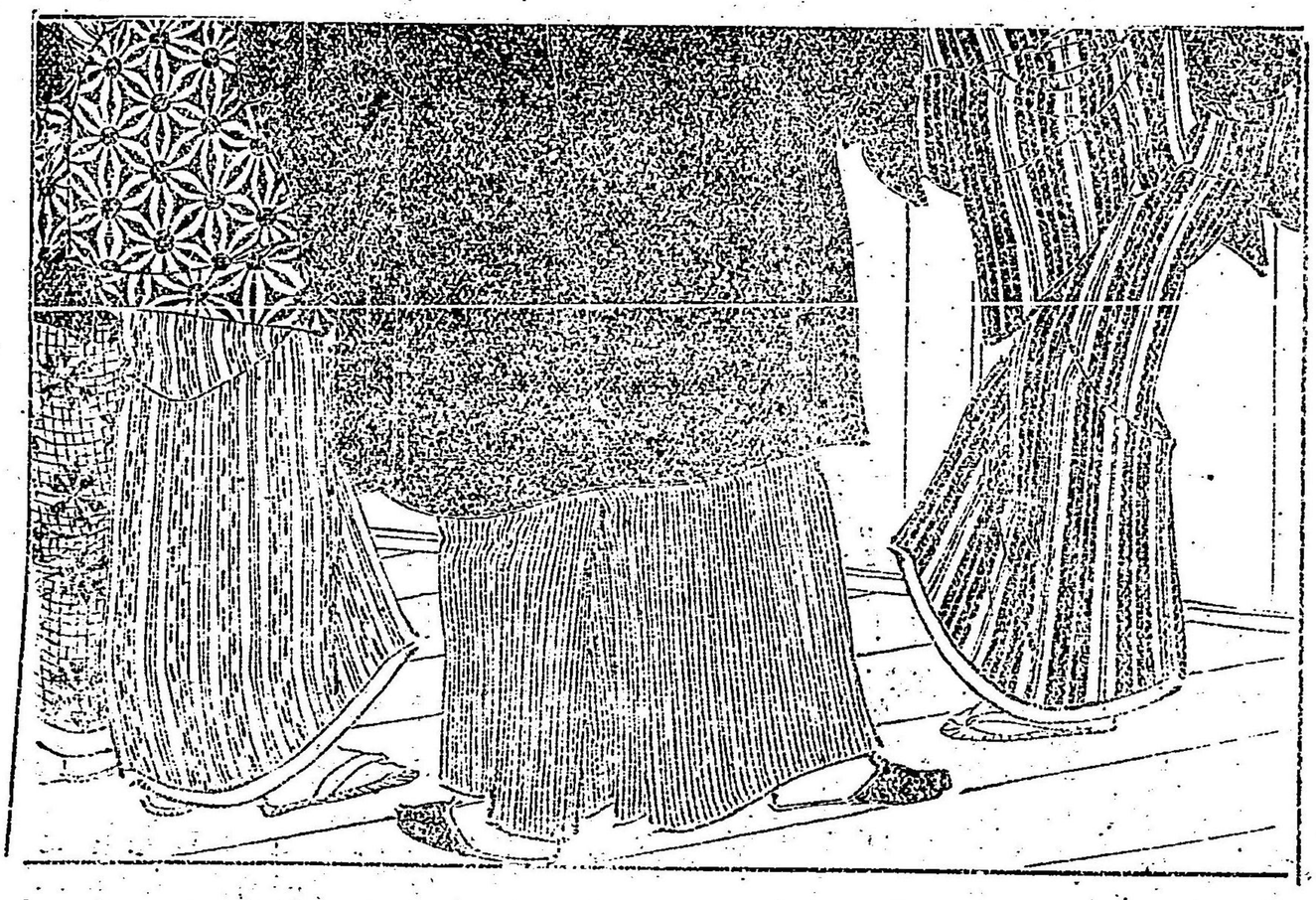
第七回

藝妓小初が江島屋の娘お藤の換玉をおりて浪華屋へ行かんとするハ慾といふ目ざすものゝあればあるべし却つて江島屋の娘お藤が藝妓小初の換玉とおりしハ洒落か浮氣か粹興かいと

と怪しきやうなれど是にも深き譯ある事あり、お藤が家ゝ代々呉服屋を營み多くの花主ある中よも華族小笠原家よりゝ殊更ある愛顧を受けて爲めよ身上もめつきゝ肥えたり北小笠原の御側用人より維新後家扶を勤め續けし室津梅之進と云へる人お藤が父勝藏とゝ至極別懇よ交りし因にて子息一郎も幼少の頃より屢々江島屋へ來りし事あり取別け梅之進が死後ゝ勝藏屆くだけの親切を盡せしかゞ一郎も恩義に感じ勝藏の病中をいひ死去の砌も懇ろに弔ひ其身大學の業を卒へし後ゝ芳桂女學の嘱託教師とおりしを幸ひお藤を勸めて入學せしめしが一郎ゝ稀代の俊才お藤ゝ絶世の美人さあきだに口善惡おき女の集合ひ男女の品評に室津教師と藤子とゝ實に一對の好夫婦お藤を訓戒しお藤又一郎よりおけ邪推お教員嫉妬深き生徒果てゝ二人が身の上に厭ふべき汚名を附け門前の郵便函よ鉛筆をもつて書ける投ぶみ教場の塗板よ白墨をもつて記せる落書ありしかゞ遂にお藤ゝ事よ詫て退校するまでよ至れり

潔白あるお藤かゝる噂を聞きし時ゝ恥かしく又た恨めしく平生温和あるにも似ず以ての外腹を立て人々の目ゝ逆さ文に附きたりや口ゝ堅に裂けたりや好くも無い事を見僞りを言ふものよと罵りし其の詞今將た思へゞ慚死せん、父勝藏の果てし迄ゝ尚かけがへの親一人あり母のお浦ゝ内外の事身一つに引受けお藤ゝ万づの修業よのみ心を傾け居たりしが女主人と侮つて雇人の甲乙好からぬ事を企てしが根とあり打續く損失に家も土藏も搖ぎ出してゝ孤柱豈で支へ得べき忽ちにして破産あ





し再び繕ひ難きに至れり、斯る意外の轉變にお藤少しく世の中の愛き艱難を味ふかと思へば是が病の種とありて母のお浦い煩付き程あく返らぬ旅よ立てり、從兄幸吉が上京せしい母の病氣全快も覺束あしと決りし後にて夫より別よ力を添へ氣を附けて呉れし者い室津一郎唯一人家より外よもありいありしが是ぞ表面の親切にてお藤が身よ取りていい深く厭ふ醜ひを當ての似せ親切、恵を受けて忘るべきやういあけれど恩を施して思ぬ者い室津一郎唯一人、是迄い大勢の下男下女を召使ひ學校通ひも手車よ乘り堅のものの横にするさへ手を拍ち鈴を鳴らせしものが母の介抱世帶廻はり遜艱難の數を嘗めつゝ世態を思ひ廻はせば晩かれ早かれ持つべき良人其の人を擇むこそ何よりも肝要あれと思ふに付けて先づ第一お藤の胸よ浮かみ出

るい餘人にあらで室津一郎年い恰ど七つませ文科大學を卒業して秀才の名聲高きが上品行正しく信義篤く殊よ容貌の秀麗ある風采の高尚き何一つ備はらぬいあく我身よい稍過ぎたれど此人を外にして他に願はしき男子を見ずと茲に思到りし從い以前腹立し事の我おから所はゆく人々の目い明らかあり口も正しく横よ開きれり無い事は見ず偽りも云はずと今更に我を折りしも笑止、落花情あり流水豈よ意おからんやお藤に此心あれば一郎も又た情ありて云いず語らず胸中よて互に婚を約したるい母が死去の前おりしをぞ然るに大阪より幸吉來りて母の介抱等閑あしと聞きしにぞ一郎も深く安堵しより後い時々立寄りて病を訪へど親しくお藤と語る事を避け母の死後も唯一ト頭り儀式までの弔慰をおせしい曾て幸吉よりお藤よ

むかひ紹談を申越せしと聞きし事のあればあり、お藤ハ假令何方より紹談を申込むとも聞入れんやうハあく一年半歳經つ中にハ室津文學士の夫人とあり今の苦勞を昔語りにせんと心窃かに樂しみ居りしに室津此程大學の命を受けて學術研究の爲め暫く歐洲へ行く事とあれり多年の宿望漸く達し一身の名譽ハ此上なくお藤も一回ハ喜びしが又はた思へば留守中の事、我が身ハ素より大阪の浪華屋へ引取らるべし、引取らるゝハ厭はねど必定婚禮の沙汰よ及ハん殊更も最期の際まで娘が上をと幸吉よ云殘たる事さへあれば其期に至りて拒まんにハ再び浪華屋へ身を托せ難し、トいふて外に寄るべもおし是は何とせん悲しやと深き歎きに沈みしも根が氣丈なるお藤斯許りの故障にて良人と願む其人の志を挫く事かハ好し浪華屋に身を投き

野よ伏し山よ寢るとも良人の歸り來るまで操の節を直うして待れぬ事ハよもあるまじとけあげにも心を決し其意を委はしくみにして室津が許へ告げ遣ハし姥のお歌に伴あれて泣く泣く大阪へ向ふ途中計らず影と形の如く我に似たる藝妓に出逢ひ苟且の話から互ひに位地をとりかへて賤しき藝妓とあり落ちしも浪華屋へ赴くよりハ遙かよ增しと思へばありし斯程までの心盡しもあはれ大川の水泡一涕果敢なき事の限りにこそ

第八回

浪華屋幸吉が戀女房お藤ハ無事大阪に到り着けりお藤ハ姥のお歌を待つ爲め名古屋に於て一泊しお歌ハ次の汽車に乘り通し旅行をおせし故お藤よりも半日程先つて歸りしとあん

そもく浪華屋の當主此花幸吉といふゝ京阪神の間にありて人も知りたる紳士よて十八九の頃及より東京よ遊學し或英學校に入りしが學資の豊おるを幸ひ悪友にそゝのかされて身持放蕩を極め三四年の久しき間に學びし書は吉原細見修めし業ゝ茶屋小屋通ひ楊弓の如きゝ百發百中と誇稱せり其中父の幸兵衛ゝ中氣といへる病を發し起居自由を失ひしよ幸吉大阪よ立歸り家の名跡を繼ぐ事とおりしが生かぢりの經濟學ゝ忽ち應用を誤まりて暫く中よ身代の幾割を減じおがら罪を社會の不進歩に歸して思ひ當らず夫より同氣の者を語らひて覺えもおき商業演説、倶樂部の創立、懇親會、凡そ此等の事ある時ゝ發起人たり幹事たり徒らに名を求めて金を失ひしが尚懲りずまに有志者交際、貧窮ある政事家ゝ奇貨居くべしと幸吉を煽り君あ

らずして我が黨の力と頼む人材おし願ゝくゝ國家の爲め一ト肩入れて貰ひたしおど口先にて喜べせ機關新聞の資金を引出し黨勢擴張の費用を取り果ゝ浪華屋の店の片隅紺の暖簾の間を分けて政黨事務所の掛札ゝ唐様で書く三代目追附け貢家の貼紙と掛けかへらるゝに至るべしと心ある者ゝ危み居たり幸吉去年區會議員とあり尚如何にもして市會に出んと機會ある毎よ運動費を徒費し選擧爭ひよ失敗を取るも笑止、折ふし先頃補缺選擧ありしかゞ久しく東京よ留り難く意あらずもお藤にゝ姐のお歌を附添はせ急ぎ大阪に歸へらし處例に因つて失敗せしかゞ習く政事上の運動を止め其の後ゝ新婚の準備に餘念なく新たに部屋を作り衣服を繕はせ賓客の爲め園遊會に人を招く案内狀まで殘らず印刷出來上りゝ斯くてお藤の到着を待

つ中も唯一つの苦心といへば新婦の心如何に在り、過る頃幸吉
は二ヶ月足らず江島屋に在りてお藤と寢食を共にし多年練磨
の技量を振りてお藤が心を得んと謀りしも相手は更に打解る
風情なく兄としては親しめど夫としては馴ざりしにぞ幸吉深
く思を沈し歸阪の後苟くも婦人の身に取り樂しく喜べしき事
の限は心を盡して進へ置きたり、果せるかな幸吉は心盡しの甲
斐ありて甚くお藤を樂しませ、着の後五日を距て首尾よく結婚
の儀式を擧げ今日は其祝心み親類出入の者を招いて道頓堀の
芝居見も實はお藤唯一人の慰みに備へん爲めのみ世間の者に
花嫁の美形を示して誇らん爲のみ、留守の役は隱居幸兵衛其外
貧乏閑引當てし店の者一二名あり、お藤は身仕度晴れやかみ盛
ひし後茶を汲んで養父の前に出「お父さんお茶を入れて參りま

した」「夫は添ないまだ同勢は揃はんのかへ」「もう大方揃ひました
「夫ぢやァ早く出掛るが好い、東京の芝居程面白くもあるまいが
「何致して此方のお芝居は大層評判でございます」「東京の芝居も
いへば先年私か上京た時一緒に出掛けた事があつたの」「左樣で
ございましたよ彼の時は島原で慥か高橋お傳の狂言」「私はもう
忘れて居ます」「歸へりに築地の嘉美屋へ寄てお飯を喰ました」「若
い者は覺えが好いなァ」

第九回

幸吉が心を込めて調へ置きし衣類彼や好からん是や似合はん
とお歌の助言幸吉の注文幾度か着かへ脱かへ漸く仕度出來上
れバさらぬだに艶美なるお藤一入よ見バえありて眩きバかり
の形貌斯程までとは幸吉も思至らざりしなるべし「ほんとうに

お美くしいと朝晩お目に掛つて居る私でさへ驚きました「ア
ラ否、婆やが嘘ばつかし」「何だつて嘘をやしませう假令廣い大阪
でもおか〳〵貴姐見たやうに美麗あ方ゝでございませんよ」「オヤ
ヤ大變何を驕つたら好いだらうね」「もう〳〵何にも驕つて
頂くにゝ及びません貴嬢のあうあお方のお供をして方々廻り
さへ致すと私どもまで何あよ鼻が高いか知れません、第一大阪
や西京の人ゝいくら奇麗でも、姿格好が左樣意氣よゝ參りませ
ん」お歌ゝ口を極めてお藤を稱す幸吉ゝ次の間よりて之を聞
き心嬉しき事限りもなく隔の襖おし明けてお藤が姿をと見か
う見「支度が出來たね」「お待ち遠さまでございました」「旦那さま如
何でございますお奇麗でございませう」「アレまた否お婆やだね
へ」「婆やの衣裝附けが旨いからのう」「オヤ大變私までお賞に預り

まして有り難う」「二三日したら西京へ出掛けやう」「ハア何卒お連
れ遊ばして」「私もお共を願ひます嵐山の花ゝもう遲くありまし
たが知らん」「まだ左程遲れても居あいだらう」「婆や祇園町の都を
どりとかが見せて頂きたいね」「左樣でございますねへ、旦那さま
は是非入らつしやいましよ」「アヽ宜しい何處へでも行かう」「いつ
に遊ばします」「左樣だあア、明日ゝ懇親會に出あくちやアあらず
明後日の商工業相談會にゝ行かあくても好からうと思つたが
是非一つ演說をして呉れエと云つて來たから鳥渡でも出掛ん
でゝ濟まん、何の道その跡に廻はした方が好い」「ナニいつでも貴
郎の御都合の宜しい時に致しませう、花ゝ又來年見られますか
ら」「オヽお歌まだ皆あ揃はんか鳥渡店へ行つて見て來て呉れー
「ハヽ畏りました」お歌ゝ急ぎ店へ行き程あく此處へ立戻りて「も

う皆さんお待ちでございます「左様か夫ぢやア行かう

此夜幸吉が新夫婦ゝ親戚出入の者を集め数十輛の車を列ねて道頓堀へ赴きたり、お藤ゝ芝居を見て楽しみ人々ゝ新婦を見て賞めぬ幸吉が願ひゝ此に足り打出しの後南地なる或割烹店に案内し盛んなる饗應をあし是より銘々立別れぬ

浪華屋の一家十数人各々人力車よ打乗り立帰らんとする途中如何よあしけんお藤が車ゝ誤つて提灯の火を消し再び燃さんとする間よ連れの車ゝ横町の角を廻れり車夫ゝ遅れじと勢をあして曳出したるが遂に又及ぶことあく凡そ十餘丁も行きし頃お藤ゝ慌東なき聲を發し「車夫さん道が違やアしないかねへ」車夫ゝ聞かざるものゝ如く更らに急いで行くこと数丁「家ゝ心齋橋通りですよ間違へちやア居ませんか行きがけゝ橋を二つ

ばかり越した限りで芝居の前へ出たんですよ」車夫ゝ倚答ふることあくいよ〳〵足を早めて馳せ果ゝ人家もまばらなる淋しき所にさしかゝる浪華屋の花嫁ゝ怖ろしさ腹立しさに最早お藤たるを得ず忽ち小初の生体を顕しかけかんばしつたる震聲にて「お前さんゝ騙おゝ、とんお淋しい處へ連て來て何しやうつたい、車夫さんてばさア、とんお淋しい處へ連て來て何しやうといふのだねへお金でも欲いんなら上げやうぢやアないか、もう此處で下しておくれ、女だと侮ぞつてほんとうよひどいよ、アレさ誰ぞ來て下さい」云へども聞かず問けども止らず救を求めん往來の人あく飛んで下んか車馳すること急あり

第十回

障礙たる月の影ゝ鬱蒼たる樹の枝に遮られて光薄く殘花夜半

の風に散りてうち淋しき事云はん方なし高津神社の階に腰うち掛けて語合ふ男女ほんとうゝ怖くて〳〵妾い今だゝ動氣がするよ其位のこたア當然だ、自分一人好い事をして己等を餘り馬鹿にしたから「アラマア妾がいつか前さんを馬鹿にしましたし「此位馬鹿にされりやア澤山だ「あのもうお金でもなくなつたの「失あつた處の事か名古屋の宿で十兩貰ひまんまと首尾よく浪華屋の花嫁におりおほせると直に擦樣を知らせるから斯いふ家に泊つて居ろと云われた言葉を樂しみに昨日までを宿屋ゝ居たが薄々世間の噂を聞き浪華屋の新夫婦い人も涎を流す程滅法界中が好い夫も其筈鴨の味だのしやその味だのと云われると己等許り空腹い目に逢ひぱんやりしても居られねへから一ト晩二タ晩新町へ浮込んだと思ひねへ「マア呆れるぢやアむ

いか、何も妾がすき好んで嫁に行つたと云ふぢやアあし、死ぬ程惚れたお前さんと末始終而白可笑しく夫婦にあらう許りに苦しい思ひをじつと堪へ娼妓にでも賣られた氣で辛抱をして居るのに而當てがましい廓遊び、だから妾が苦勞をするのさ「苦しいか嬉しいか何して夫が分るものか「アレだもの、ほんとうに悔しい「己等だつて恨めしい「夫ぢやアもう芝居も廢さう「何故々々折角やりかけたものを「だつてそんな疑受けちやア假令一日でも一ト晩でを分れて居るのが妾い否而して旨く行きさうか「お前さんがちつとの間辛抱をして呉れる氣あら旨く行くに違ひないが今のやうな話ぢやア何をするにも駄目な事さ「旨く行きやア辛抱する「覺束ないね「大丈夫だ「そりやア左樣と今の亦夫いお前さん懇意なの「懇意なの所か彼奴ア己等の朋輩で道樂故に

賽錢

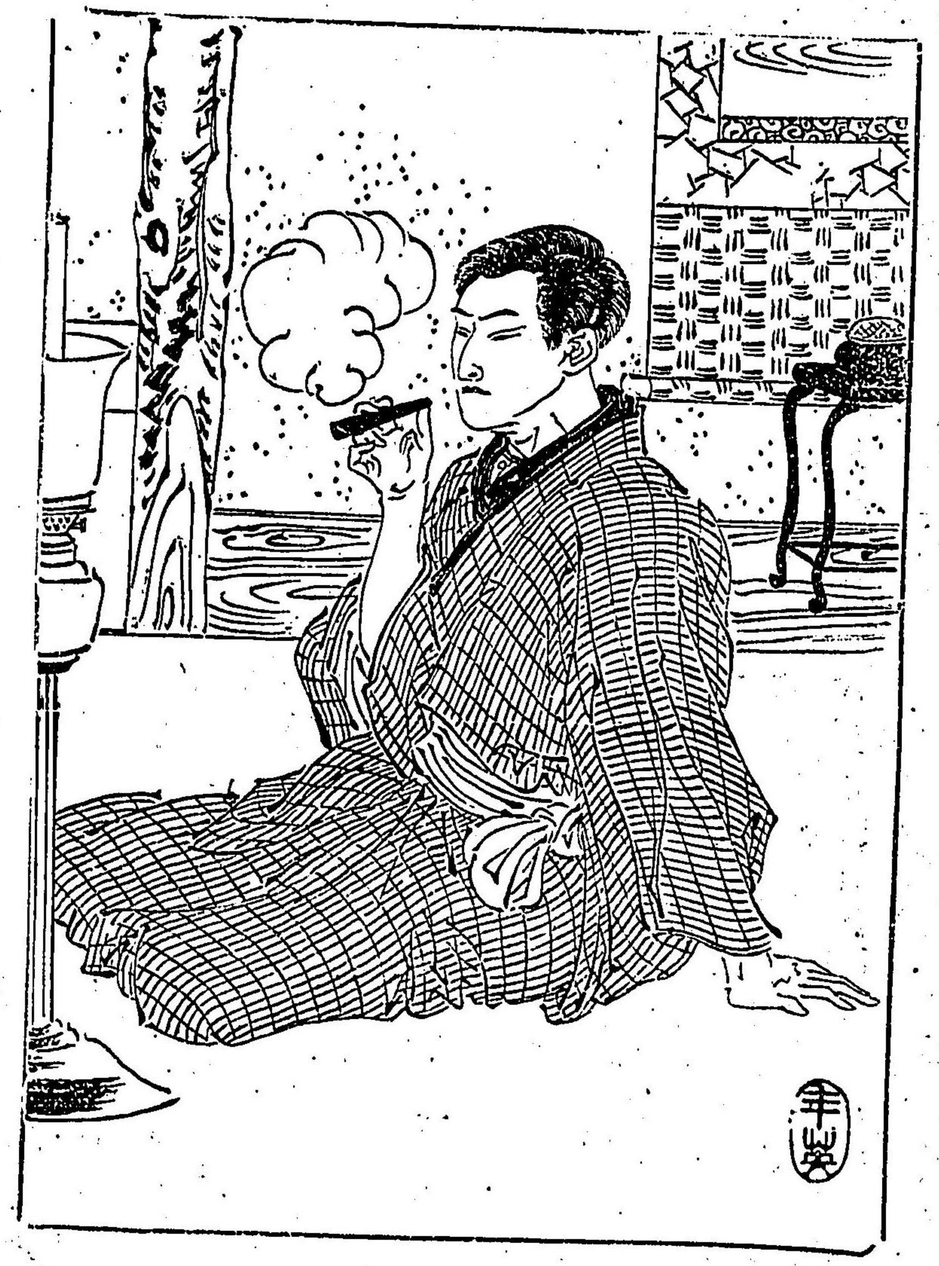
東京の奉公先から金の持逃げ二三日前道頓堀でふいと逢つた昔馴染いろ〳〵お話から彼奴に頼んで浪華屋の家の模様も委しく探り今日の芝居見物まで聞出したから彼奴を遣ひ汝へを旨く攫はしたんだ「左様かへ、夫れおら夫れのやうよ鳥渡話をして呉れると妾だつて喜んで來るのよ飛んだ怖ひ思ひをした、而してアノ口留めい」先刻半助掘らした「少あいねへ「だつて無へものお前さん何處に居るの「宿賃か無く おつたから難波村よくすぶつて居る先刻の野郎が處へ行つて昨夜から厄介だ、何か少し借して呉れへ「今夜此處に持てやアしあい「夫ぢやア明日でも貰ひに遣らうか「あの誰を「今の野郎を「お廢よ、そんな事をして御覽直に化の皮が剝る「ぢやア何しやう「家まで妾を送つてお呉れ左様するとお金を遣るから「だつてお母が居るだらう「居たつて好いよ「そいつア行ねへ「マアア妾に任してお出「夫ぢやア少とも早く行かう「鳥渡お待ち用があるから「何だ「妾を打ておくれ「ヲイ「打んだよ、たんと痛まないやうに「腹でも痛むならたゝくより撫つて遣らう「腹も何にも痛みいしあい、唯無闇と擲るんだよ「汝氣でも違やアしねへか「好いから早く「何邊を打つんだ「マアア最初に頭の方から「奇麗に結つた髪が毀れる「毀れるから好いんだよ「全然譯が分らねへ「打つのが否なら唯髪を引毀しておくれ「夫から何する「夫から地の上よおしとかして二三度引摺り廻はすんだよ「勿体ねへ有麗な衣類が裂けて仕舞ふ「裂けるから好いんだよいよいよ此奴ア氣違へだ

第十一回

新婚の祝心芝居歸りの翌應に逢ふた時笠抜きたる後頭手代い

云ふも更あり主人幸吉も太く酔ひしより一行の車浪華屋へ帰り着くまで肝腎の花嫁お藤が道にはぐれし事を知らざりしが帰来先づ心附きしゝ例の姥のお歌あり是より店の者車夫を走らせて諸方を尋ね幸吉ゝ狂氣の如く起たり居たり報知を待つ中時ゝ早や十二時を過ぎぬ中氣病の幸兵衛を除き浪華屋の家内の者ゝ男女の分ちなくお藤が行方探がす爲め先より殘らず家を出拂ひ幸吉一人店の間に在て車の響に耳を欹て足音に迚も上り幾度か欺かれし末不意に表の戸を開て入来しゝお藤ありヤレ嬉やと幸吉ゝ飛立つ程の思ひありしが見れば一人の男を伴ふ迚も知らぬ顔なるにぞ不審さうに迎入れて其儘奥に誘ひ行り坐漸く定つて後お藤ゝ幸吉に打向ひ「マア〳〵飛んだ目に逢ました」時の衣裳は土に汚で其上處々裂け髪ゝとはれて雲の

如く亂たり幸吉ゝ夫と見るより既に十分の恐れを抱きしにお藤の言葉斯くの如くなれば いよ〳〵深き憂苦を添へ「全体何した」お藤ゝ顔にふりかゝる髪の毛をあで上げながら「妾を乗せました車とはぐれたんでございます夫から妾を人の居ない淋しい所へ連れて参つて「ムヽ怪しからぬ奴ぢや「いろ〳〵」とあの恐ろい事を言掛けましたから假令妾ゝ殺されてもいふ事ゝ聞かないと申しますと夫ぢやア手込めにするといつて「チョッ不届な「もう もう貴郎打つやら蹴るやら髪も衣服もとんぢに致して呉ました、妾ゝ一生懸命聲を上ましてを誰一人来る者ゝなし、はんとうに悲くて悔しくて」幸吉ゝ眼を瞋らし歯を切つて思ゝず前に乗り出す「ずんでの事恥かしい目に逢ゝうと致した時此方が来て助



げて下すつたんでございます」幸吉ハホッと息「夫ぢやア此方に助けて戴いたのか「此の方が來て下さらないとそう〳〵二度と再び貴郎にもお逢ひ申す事ハ出來なかつたんです」傲慢なる區會議員どの此時始めて坐蒲團を下り仲んの男に一禮おし「唯今承はれバ御陰をもつて思妻藤も危い難儀を遁れましたさうで誠に添う存じます全体貴殿ハ「恩人ハ手を揉み頭をかき容易に答へかねたるを側よりお藤ハ啄を容れ「サア何も緑と云ふものハ不思議あるもので此方が婆やの息子さんでございます「ナニ婆やの、アノお歌の」恩人ハ而目あげに「怪乗吉と申す道樂野郎でございます「左樣かね乗て嘶にハ聞いて居たがツヒ先頃上京の折も騙逢つてお目に掛らず「是非お尋ね申して御挨拶も致したいと思ひながら手前にかまけて御無沙汰ばかり何とも申譯でざ

いません」而していつ此地へハ「ツヒ二三日前參りました」何か商用でもあつて「ナニ左樣云譯でも「お宿ハ「宿と申して別段に極まつた所もございませんので今晩ハ高津邊をぶらつい居ります」と此方の御新造ハお目ハ掛り思掛けなくお母の居先が知れて此位嬉しい事ハございません「夫ぢやア婆やの居先を尋てわざわざ當地へ來のかね「お聞及びも厶いませうが餓兒の時から戯者でさん〳〵お母に心配をかけ先頃旦那のお供をして東京へ參つた時ももう道樂ハ止めて呉れろと勿体ない母親が子の私に手を合せて頼むやうに口説まするを好い加減ハ聞いて置き出立の前の晩に遊びハ行つて家へハ歸へらずとう〳〵お母ハ顔も見せず別れて仕舞つた親の罰奉公先でハ暇を出され親類でハ置いても呉れず喰ふに困つた所から始めて夢の醒めた心

地ァ、誤つた〳〵責めてはお母を尋ねて行き假令車を曳いてありと一人前の稼ぎを仕出し是迄不孝を働いた理合はせを致したいと此方へ参つたものゝ不馴れな土地で夫から夫と仕事に取附く譯にも行かず何もはや困りました過つて改むるに憚る勿れだ、一旦親に不孝をしても氣が附いて改めるゝ感心だナニ心配をするにゝ及ばんお前さへ構はあけれゞ此方の店に居るが宜しい、お藤婆やゝまた歸らんか、歸つたら逐はしてやんお、婆やも嘸喜ぶだらふ

第十二回

大事の主人の行方を失ひ身も世もあられぬ思ひして打しほれつゝ立戻れゞ主人の健康で歸れるのみが其危難を救ひ得しい思ひ設けぬ悴乗吉重ね〳〵の喜びをじつと堪へて片頬に笑み

片頬に見せる腹立も主人夫婦が取做しに漸く解けし婆やお藤が湯に入り髪取上る中乗吉とさし向ひ「思ひ掛けない事からして御新造さまにお逢ひ申し御難儀を救ふた爲め此方へ置いた使つて遣らうと旦那さまの思召し有り難いと云ひたいが何も私ゝ心配であらあい、若や此方に居る中に不都合な事でもあると私までが難儀をするから折角の思召しでもお斷りを申さにやあらぬ」と云ふ母親の顔打守て乗吉ゝ涙を泛べ「もう是ぎりで身持を直すの今から心を改めるのといつも氣体めを列べて置いて心配掛けた不孝者左樣思はれても仕方ゝねへが今度といふ今度こそ屹度了簡入れかへてお母の分までも旦那や御新造さまに對し御恩返へしをする覺悟夫ともお母に見捨てられやァ大川へ身を投げて死ぬより外の思案ゝねへ」はら〳〵と

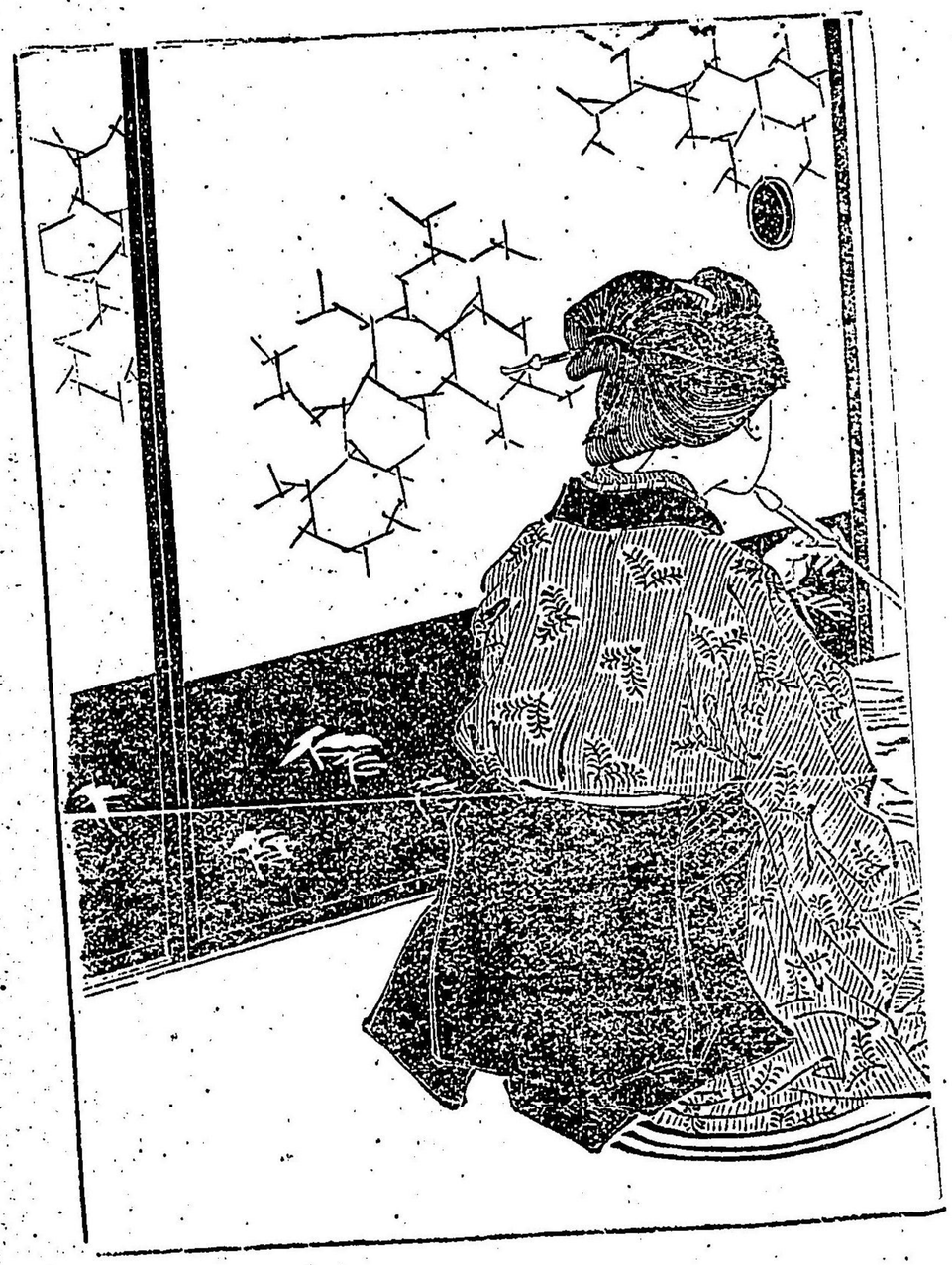
涙を流し眞實見えて言放せば口でこそ氣強くもあれ素より子にハ甘き母親早櫛干よ兼吉が片足掛けし心地にて慌だしく膝おし進め袂とらへて確と引留め「マア〳〵待ちあ夫程までにいふからハよもや間違ふ事もあるまい「夫ぢやア旦那の仰しやる通アハ置いて頂くと」「夫を聞いて安心した、是からは一生懸命お店の爲に働いて、お母にも喜ばせる「左樣さへあると明日が日に死んでも思殘しハない「詰らぬへ事を、是から心を入れかへて孝行しやうと思つて居るのに死おれて仕舞つて何するものか千年も万年も長生をしてかくんあせへ」「凡そ人の母たるもの我子よ優しく云ハるゝ程嬉しき事ハ世にあらじ況してや是までありたけの苦勞を掛し悴の口より斯くしほらしきことを聞かんと思ひも掛ぬ母のお歌喜び涙止め度もなし

湯ふ入り髮を取上げて立出るか藤「定めし話しがもてたらうねへ「オヤ御新造さま大層か早うございましたお湯を召しましてなにも痛みやア致しませんか「イーエお陰で何ともありませんか「それハマアお宜しうございましたあんあら婆やがお春中でも少し撫つて差上げませう「ナニもう澤山「妾より兼吉さん何處も怪我ハおかつたかね「私ハ何とも致しません「ほんとうよ憎い車夫でございますね「憎いの憎くあいのッて御新造さまがお留めあさらにやア打殺してゝも遣りたかつた「一体何處の奴だらう「料理屋で雇つたんあら調べて見ると直に知れる」お歌母子が腹立しげに語るを聞いてお藤ハ側し「憎いにハ違ひあいが今若し事を荒立てると暗がりの恥を明るみへ持出すも同じだから必らず世間ハ知れあいやう店の者にも旦那さまが口留めをす

さつた樣子お前がたもその積りで何卒内しよにして居ておくれ「成る程夫も沙道理、好しんべ車夫を探がし出し警察へ訴へた處が旦那や御新造さまのお名が出ちやア外聞の好い話でもおし、とりやア寧そ内々でお濟しあさるが宜しいでせう」「さう伺へばそんなもの乘や、お前も今夜の事を必ず人にいふでないよ」「サア婆や、乘さんも疲れて居やう、早く二階へでも寢かしてお上げ」「ナニ是い私が側に寢かしましてお朝も早く起して遣ります、どれ鳥渡寢支度をして參りませう」お歌が部屋を立出る跡見送つて二人いにつこり「悪黨、ほんとうに爲る事が旨へや」「何だねへ、大きお聲をしてサ、聞いれたら何かしたな

第十三回

先の夜曲者の爲め浪華橋より突き落されし江島屋の娘お藤位地をかへての藝妓小初い如何に成行きしぞと尋ぬるに折よく通り合はせし船に救はれて今尚無事あり小初を救ひしその人い南地に住める鶴次とて初め東京よし町の藝妓たり夫より諸所を經巡りし末今の場所に足を留めて俠氣の名聲高き女家業柄とて派手作り鳥渡い二十三四と見ゆれど實い三十路を越えたりとか、其日い堂島の客に招かれ舟を浮べて櫻の宮へ花見に行きし歸へり途夜網打たせて遊ぶ折流れ寄つたる美人の死骸救揚げて介抱し蘇生らせし其上にて素性を問へば若松町ある六兵衛といへる者の娘故あつて幼少より東京柳ばしの藝妓よ買られ小初と名乘る者ありと答へ仔細を聞けば親許へ今日立ち歸へる途に於て曲者の爲に此の川へ突落されし次第と云ふ鶴次い深く不幸を憫れみ若松町いはんの目の先父へ知らせて



山本力

喜べさんと客に乞ふて舟を寄せ船頭二人に意を授けて若松町へ遣はせし跡客ハ酔醒の心地よや少し寒氣づきたりとて此處より上陸し車を雇て歸宅せり、待つこと一時間餘船頭ハ歸來りしが若松町を門並み六兵衛さんと尋ねても遂に探し當らずといふ、斯てハ一ト先づ我が家へ伴ひ明日にもあらべ共々に力を盡いせて尋ねんと鶴次ハ小初に其意を告げ己が衣裳の半を分ちて渡れたるものと着かへさせ車を仕立て南地なる己が住居へ伴ひ行けり、鶴次ハ能ふ限り親切を盡して小初を介抱したるより翌日は心地常に復してまた咄かの煩ひもなし、朝飯後鶴次ハ小初を誘ふて湯に入り髪を結ハせたるが其容貌の婀娜に麗はしき新地廣しと雖も恐らく類あらじと見ゆ鶴次ハ所持の衣裳の中にて成るたけ品質の良き向の若く派手あるを揃へて小

初に着せ自からも仕度整へ相乗の車にて若松町へ赴きしよ六兵衛ハ昨日の夕住馴し家をたゝみて何處ともなく立出たりと聞き二人ハ太く力を落し尚さまゝ〳〵と手を盡して行方を尋合ハしたれども知る者絶えてなかりしとぞ

着早々危難に遭ひ藝妓鶴次が情にて漸と命ハ取留めしもはるばる尋ね來りし父の行方知れずと聞ける悲しさ我身誠の小初ありせば斯くもあらんと愛苦を粧ふよ鶴次ハさこそと察し遣り「マア何したといふんでせうねへ、親父さんにした所が引越すあら引越すやうに近所へでも話してあると斯あにまでつきやアしあいもの近所の人だつて餘りです引越した先位聞いて置いても好からうに併しお前さん心配をおしあさるあや、其の中にハ何ともして探出してあげますから、先づ當分ハ不自由でも

妾の處よお出おさい」小初い嬉し涙にかきくれ「命を助けて下すつた詐りか昨夜からの御親切死んでも忘れい置きません此の上お言葉よ甘へましていおしに此のまゝ東京へも歸へれませんから何ぞ當分下女代りにでも此方へ置いて下さいまし」「もう〳〵お前さんさへ我慢が出來あらいつまでも居て下さいよ何も妾い我儘だからお前さんも其の積でねへ、兎角遠慮をしつこあし」流石い夫者の如才あく我から解けて氣を置かねべ小初もいとゞ頼母しく妾い何處までも姉さんと思つて我儘を云ひますから世諸の嬉ける妹を持つたと姉さんも不承して精々小言を云つて頂戴」何か左樣して下さいよ、だが厄介お姉さんだと愛想を盡かされおけりやア好いが、オホ、〳〵」「オホ、〳〵」親しき話に春の日の暮れかゝるをも知ら

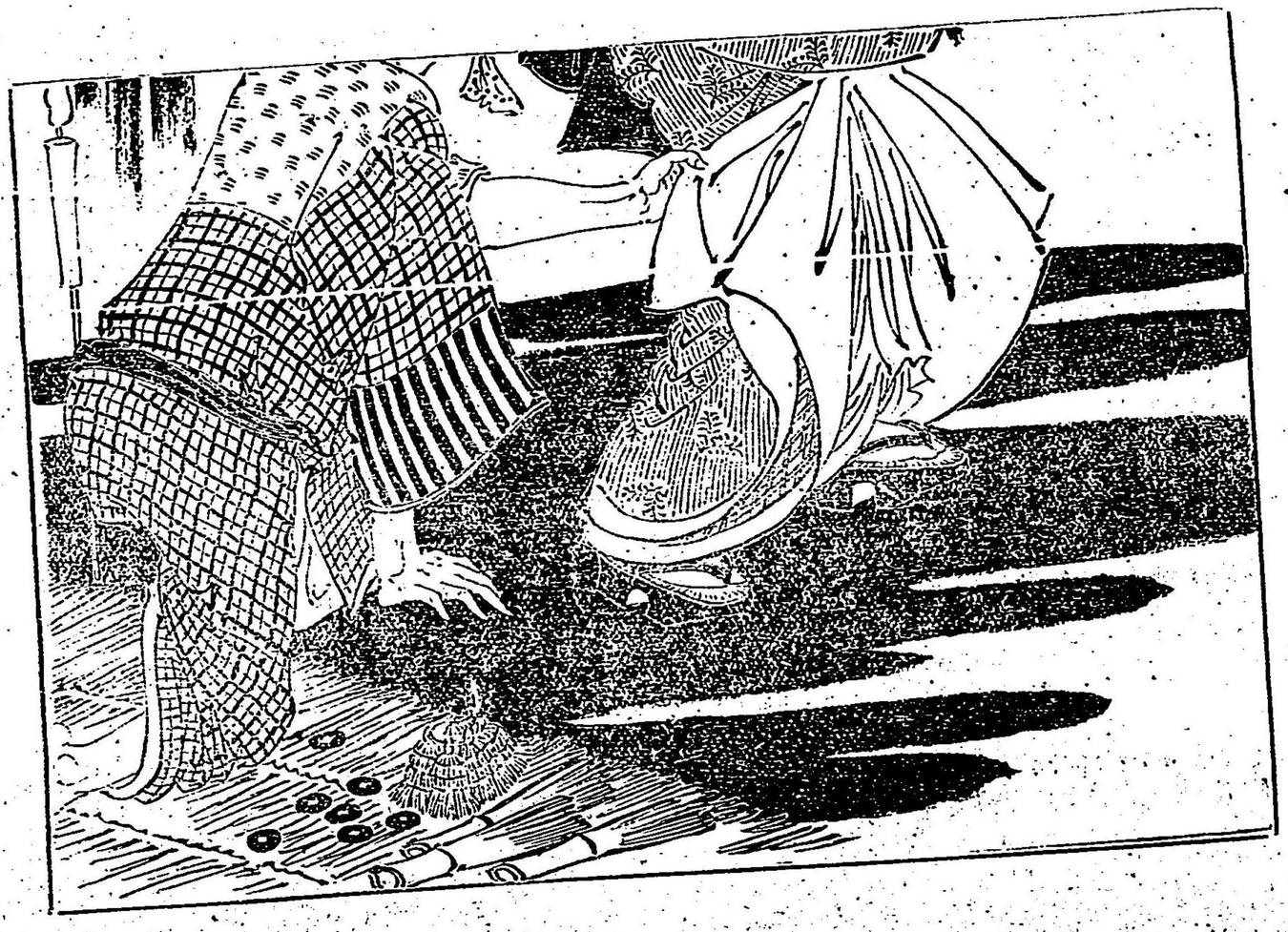
ざりけり

第十四回

日い早西に傾きて藝者屋の門口燈火打つ音の忙しき頃南地の料理屋蔵の家の若い者鶴次が宅へ音訪れてお座敷を報せ去る鶴次い小初よ助けられて急ぎ身仕舞をする中へ「小初ちやん淋しくとも少しの間留守をして居て下さいよ」「稼ぐ〳〵行つてお出おさい」「妾が居おいからといつて又いろ〳〵お事を案じちやアいけおい」「大丈夫です、姉さんが力を附けて下さるからもう〳〵親爺に逢いおいでも心細い事いありません」「家にいあのお淺が居るから、千日前か道頓堀へぶら〳〵出掛てお見おさい夜店が出張やかですよ」「まだ何處も見た事が有ずんから跡でろう〳〵出掛ませう」だか此頃い拘撲が多いから大事お物い持おいが宜

い「オホヽ何も彼も盗賊に取れて仕舞ひ衣服といやア姉さんのかり着ですもの」語り戯るゝ中に支度整ひぬ、小初ハ鶴次が衣服の着振り其他の事に至るまで注意さらく怠らず窃かに學ばんとするものゝ如し、斯て鶴次の出去りし跡小初ハ獨りしよんぼりと火鉢の傍へ坐を撫へつくく此般の事を思へば我ながら狂氣の沙汰なり流も清き江じまやの一人娘に生れしものが風のまにく廉寄る柳ばしの藝妓風情と身分をかへて此地に漂ちひ尋ぬる假の父にハ逢はで思ひ設けぬ危難に逢ひ情ある人の爲め幸く命助けられ今ハ此家の食客、さりとて主人も高が藝妓茶屋に細き線香に烟りを立つる家業と知りつゝいつまで此處に留るべき若し去とすれば何處に去らん、何處ゑ去りて誰を便らん誰を便りて如何ゑ暮さんと文讀みもの書く業あらば小

學校の兒女に授けて糊口にする道もあれど夫れハ藤子として のことのみ小初がすべき業にあらずと思ひ病まつて忙然たりしが更に思ふ誠の小初、巣好く藤子ゑあり濟せしか若し誤まつて中途より馬脚を顯ハす事あらば斯る苦勞も水の泡寧ろ彼のをり大川にて死せるゑ勝る恥あらんまた彼の時の山者ハ誰、盗賊あれば物をこそ取れ命取つて何かせん夫とも遺恨あつての事か、人にこそ恨ハあれ恨るゝ覺えハなきをと再び案じ侘びたる末、アヽ我あがら愚かく假令如何に苦しめばとて浪華屋に此身を托せ頑固ある叔父愚かしき從兄の爲め日夜責めらるゝゑ比べて倘勝さる事遠かあるべし、泣てを明し暮す中にハ我慢ふ人も歸り來ん今の苦勞を物語りて賞めらるゝ時節もあらんと思ひ直して帶引かめ下女のお淺に斷り置き乘て鶴次の話



に聞ける千日前へと出行きたり

熊の藝道猿芝居手術輕業生人形のぞきからくりさまゝの見世物小家の前を過ぎ両側の夜店彼方此方と見廻わる中風よるまるゝ蠟燭の火影も薄き片隅よ酒瓶の破れたるを布き言譯程に竹のふし合はせを往來ふ人にかき口説て合力頼む老人あり病上がりにや痩衰へて實に骨と皮許りあるが未だ肌寒き春の夜に單やら袷やら綴合せて夫ともに處々破れたる怪しの襤褸一貫を纏ひ打慄へつゝ坐したる狀容向いて唾する人わあれど立向ふて錢投ぐるわ稀れおり小初わ側隱の情に堪へず帶の間の小錢探つて何程か前よさし置き北盛行過ぎんとおしたる時彼の老人わ慌たゞしく半身土上よ投出して小初が裾を引とらへ血を吐くかとぞ思わるゝ苦しき聲

をふり立て「こりや待て娘

第十五回

物乞の老人に引留められて太く驚き扨わしさに狂氣せしか聊あるかと言かけしが是わ藤子としての驚駭小初にわ一人の父あり此老人が夫なるか問試みんと思極め蹶く胸をおし靜め往來の人に氣附かれぬやう近くさし寄つて聲を密め「此處わ道中、人の見る目もありませすから明日でもお家へ參ります、シテ唯今のお住居わ」と問掛けられて件んの老人はふり落る涙を拂ひ「ナニお住居ぢや、己れが心得違ひから此親爺まで追手の衆に痛くあい腹を探られ何んでも親娘馴合ひで逃亡したに違ひわあい夫も唯の逃亡あら又捌辨のしやうもあるが大それたお客さまの金まで盜んだ不届女定めし親も何程かかすりを貰つて

居るであらうと大聲揚げて呶鳴り立られ六十ゐまる今日まで正直者よ律義者よと人さまに賞められた己までが恥のかきあき忘れもせぬ十二の歳柳橋の川田屋から是非とも養女に貰ひたいと傳手をもつて頼まれた時天にも地ゐもかけがへのない唯た一人の娘だから手放す事ハありませんと一應ハ斷つたがまたつく〳〵と思ふて見れバ母親のない女の子取別け貧乏な家ゐ育ち苦しい思ひをさせるより人さまゐ貰はれたら其身も却つて仕合はせと可愛いあまり養女ゐ遣ると程なく川田屋ハ潰れて仕舞ひ養父母への義理を立て藝妓にあると知らせの文可愛さうとハ思つたが一旦受けた恩もあれバあるあとも云かねて懇々同意をして遣る時も必らず腹まで腹しくあるゐ是許りが頼だとくれ〳〵書いた手紙の文言ゐれを己れハ何と讀ん

だ養父母の爲めにこそ藝妓にも娘を賣る假令餓ゑても凍えても賤しい勤めをさせて置いて食ものにせぬ此身の潔白病み煩つて藥も呑まず二日や三日ハ食ふものもろく〳〵食ハず過しても錢一文送つてくれ貰いで呉れと云ハぬのハ一日でも片時でも早く藝妓を止させたさ夫程思ふ此親爺が心を知らず色狂ひ盜みまでする根性とハ見下げ果た人でなし親よ娘と名の付くからハ一つ腹でおいといつても所詮聞分けてハ下さるまい責めて鍋釜賣つておりと私の方で出來るだけハお償ひを致しますと茶碗皿まで道具屋に遣り僅かのお金を調へて追手の衆ゐ渡す時も誠に憎い奴でハござるが吃度私が探出して抱へ主ゐ聊かたりとも御損耗ハ掛けまいから何卒お慈悲に暫しの間盜みかたりをした事だけハ内分に願ひますとくれ〳〵も頼ん

で泣いて住み馴れた家を仕舞ひ此處の供養彼方の緣日迄ある人の袖にすがつて見ずぼらしい物貰ひ捨たい命を斯樣までして生存らへて居るといふも何ぞ己れを尋出して抱へ主より引渡し詫びをしたいと思ふ許り夫程精神の腐つた娘を持つたのも我身の不肖と此已だけも諦めもせうが裕父母に對して何も濟まんそれとも己れ言譯あるか」と思ひも掛けぬ事の數々老人に責問はれて小初は驚き且呆れ誠の小初は左程まで心好からぬ者あるからうき川竹の流れの身より色より狂ふ事もあらんが盜みをせしとは聞捨てあらず假りにも斯る汚れし人の名を呼び変に變りしは我あから淺ましゝと無念の涙にかきくれて暫し兎角のいらへも得せず小初も泣けば父も泣き四ツの袂を絞る折から突然小初の襟首掴み引廻したる荒くれ男「汝見附けた太へ

女だ

第十六回

物乞の老人に娘呼はれ其驚駭の夢覺ぬ間に又もや一の驚駭到る小初は夢に夢みし心地振向いて見る其人は年の齢四十有餘遂に覺えなき男なれど扮打を見て察するに東京よりの追手あるべし「もう此處で見附けたからにやァ逃うといつて逃がすものかヤイ老爺好くも〳〵知ねへなぞと己等に向つて嘯とぼけたナ」老人急に急立ち「何を私がとぼけましたお前さんに馴合ちやの一つ腹ぢやと云はれた悔しさ、己れ娘を尋出し縄かけて渡すまでは假令死んでも死にはせぬと神佛にも願をかけ是此通り人さまに唾をされて恥かくまでも人の往來の多い處へ出さべつて物貰ひ何ぞ娘を見當りたいと思ふ念が漸く屆き今此處

で逢ましたから直とお前さんよ引渡しお詫をしやうと思つた處「エヽつべこべと喧しいやい大方二人で逃亡の相談でもしだんだらうサア泥棒めまで〳〵せずと來やアがれ、何だ泥棒でもしやうといふ圖太へ根性を持て居あがら泣るでもあるめへいくら其優しい面に泣をあがして惚れつぽく見せやうと思つたつて誰が其手を喰ふものか」と玉の如き手をむゴと取り裝裙よ縋る老人を蹴飛して見向もやらず小初を引立て立去たり引かれ行く途々も藤子の小初い淺ましく口惜しく好しや如何ある苦みも身よかへて堪忍んとい素より覺悟の上あがら潔よき身よ汚れたる盜みかたりの名を受けんと返す〳〵も遺憾あり濟そ素性を打明けんか立留つて容を改め「少し待て下さいお話をする事があるから」流石理非の聞分もあく邪正の見境付ぬ男も

暫し足を留め口をつぐむまで形容言葉も改まりしが又更に思ふやう今此處まて素性を明かせば是までの苦みも水の泡と消ゆるのみか藤子とあつて浪華屋へ入込し誠の小初の事も顯はれ我から約を破るものあり斯て藤子に成り返りし後我身い如何におすべきや立戻るに家いおし浪華屋へも行き難からん小初としての藝妓奉公是い素より其分あれど藤子としての賤しき勤い好し死するまでを爲し難し表に受くる辱しめは小初と思ひ堪忍び内に保つ潔白を藤子と思ひ安んずべしと漸く思案定まりし時男い濁みたる聲を上げ何をぐづ〳〵して居るんだ話があるあら跡で聞く」と再び小初が手を把りて引摺る如く行きかゝる折しも其の家の座敷を濟して我が家へ歸る藝妓鶴次夫と見るより呼留め「オヤ小初さん何處へ」はつと許り驚く小初

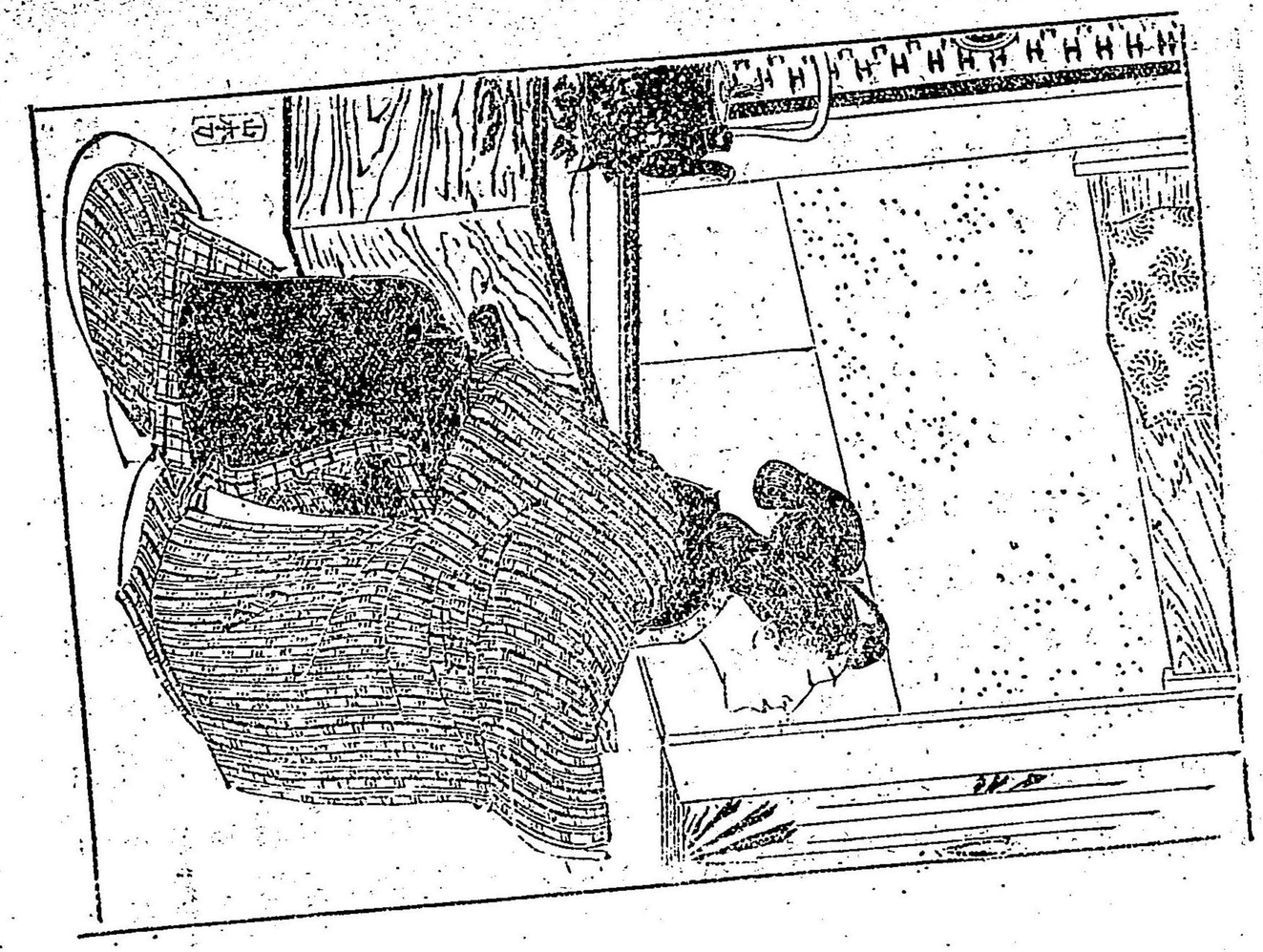
誠明かして言ふにハ言はれずさりとて追人に捕はれしとハ何もつて答へかね只管當惑の体あるをあがしめに見て同伴の男ハから〳〵と嘲笑ひ「お前さん此女を御存じですか」「ハア知て居る處ぢやアありません」「左樣夫ハお氣の毒だ、此女ハ逃亡ものですだから私がふんづかまへて一緒に連て歸へるのさ」「オヤあの小初さんがお前さんとを逃亡してヤア左樣ですか」「唯の逃亡おらまだしもの事、而ハとんなに優しくても太ふしい女だからお前さんも其積りで交際あら交際ひあせへ」小初として罵らるるを藤子が身にて聞く苦さ無念の齒がみ口惜し涙、鶴次見かね聞きかねて實し思案の体ありしが「もしお前さん誠にヤかねましたが鳥渡此芦の家へ立寄つちやア下さいますまいか」「へー此料理屋へ」「決してお手間ハ取らせません、少し其妓へ妾から話を

したい事があるんで」「何せ出立ハ明日の朝だし折角のお頼み夫ちやア鳥渡寄るとしませう」「左樣ですか何も誠に濟ませんねへサア〳〵小初ちやん泣く事ハあい一緒にお出で」鶴次ハ二人を誘ふて芦の家へ引返し奥まりたる座敷へ入れり

第十七回

鄭波新地置の家の奥座敷にハ妓鶴次主人とありて追手の者と小初をもてなす素話しでハいけませんから何ぞお一つ飲つて下さい」物の言ざま坐作進退内儀女中の扱ひにて鶴次が格も大方分れバ追手の者も言葉を改め尊うやまふぞ心可笑し「こんお御心配を掛けちやア濟みません」「何致してほんのお一つ飲るだけです、時に小初さんの事ハ何したといふんですねへ」「まだ御存じがねへんおらお話を致しませう」「何ぞ聞かして下さいまむ

「丁度一週間程前の事です東(兩)國の中村屋で送別會の一大一座に小初さんも出ましたが其崩で柳ばしの金波亭から跡口が掛つて大變歸りが遲いから大方泊りにあるんだらうと家でも皆あ寢て居ますと夜の引明けにぼんやり歸り宵から少し用があるつて待つて居た乘吉といふ懇意な男を誘出し濱町の水天宮へお參りをするといつて家を出たきり歸らないのですその中金波亭のおかみさんが其青にあつて飛んで來て小初ちやんは何うしたといひますから先刻歸つて水天宮へおまゐりに行きましたとそのまゝを答へますとサア大變あんでも小初ちやんは逃亡をしたに違ひあい其證據にはお客さまのお金を盜んだと云ひますから家でも皆あ驚いて直に水天宮へ人を遣り彼方此方を探がしても案の條知れません其處で抱へのお酌が云ふやア何でも姉さんのお父さんが病氣だつて手紙が來たから大方大阪へ歸つたらうといふんで早速私が跡を追かけ親父の處へ來て見ると存ぜぬ知らぬとしらをきつてあか〳〵居先を言いないのです併し何でも尋出し引渡すと受合つた上鍋釜道具をべつたり賣つて僅かの金を私に呉れ旅費の足にでもして呉れろと甘く此方の機嫌を取つて實い自分も影を匿くす惡企みと見扱きあがらも態と其の手に乘たと見せ朝晩親爺を睨て居ると案の條唯た今親娘寄つてひそ〳〵話しまんまと首尾よくわあに掛けふんづかまへて遣つたんです」鶴次いつく〳〵之れを聞き「お前さんのれ話ですが小初ちやんは四日前汽車で大阪へ來ましたが其晩浪華橋で盜賊よ逢ひ川の中へ突落されて危あく死んで仕舞ふ處を妾が助けて上げたんです夫から翌日妾も



一緒に老松町へ尋ねて行くと親父さんの其夕方何處かへ引越して行方知れず仕方おしに今日が日まで妾の家へ泊めて居るので親父さんと此妓とが一つ腹でおい事の憚かに妾が受合ひます、マアそれの何でも好いとして此妓がお金を盗んだ事の金波亭から訴へましたか「夫がサア仕合せお事に訴へおいんです金の高の多いんですか「ヘイ大枚三百圓、ねへ小初さん左樣だらう」小初の兩手を膝に突きさしうつむいて木像の如く身動もせず答へもせず鶴次の少しと胸をつき「三百圓」思切つて遣附けました併しお客が好い方で取られた金の仕方がおいから必らず人よいつて呉れるお金より名前が惜しいといふんで一切口封めをしましたので私等までも何處の方か今よお名前も知りません、夫れとも此妓の不顔からおかゝ〳〵の腕前を評判を取たい

け旨く一杯そのお客より口留の御馳走を前もつてして置いたのか知れるとつちやアありませんが稍打解た話を聞き鶴次も始めて笑を催ほし「オホヽ大方小初ちやんの氣でゝ貰つた積りおんでせう、時にものゝ相談ですが小初ちやんを妾の方へ譲つちやア下さいませんか「何ですか、あの此妓を訴てさへおけりやア今から戻つて是迄で通りお座敷へも出られませうが假令貰つた積りにしろ一人でも二人でも盗んだとか持逃げしたとか思つて居る人があつちやア小初ちやんも氣持が悪しお前さんとてもしても除まり面白くありますまい「そりやもう姉さんの仰やる通り是れから逃れて戻つた處でおか〳〵今までのやうに流行る氣運ひいありませんから若しお前さんで思召があると私の方へ仕合はせで其「夫ちやアこの樣いふ事にしますから何ぞ明

日でも妾の方まで小初ちやんの身を附いたお拂ひの分を知らして下さい夫迄の處小初ちやんに妾が慥かに預かります、ねへ小初ちやんも其れが好からう」小初に辛うじて首肯きぬ

此夜に程々にして別れ翌日彼の逗手の男に電信をもて東京に掛合ひ小初が前借負債の内鶴次を對して何程か負け早速其日小初が身に讓渡しの相談出來たり蓋し鶴次に特別の俠氣小初が悲境を憫れむが上金渋亭の一條も必定それ丈の譯ありて然るもの敢て盜む心にて盜みしにあらざるべし其美なる此の如きに加へ技量勝れし天晴藝妓斯る女を抱へてこそと心窃かに感じたるより此事には及びしなり

小初が艶色に見て知れり技量の程に聞いて知れり特り藝に至つては未だ見ず聞かねど恐らく斯る質の女にて藝を好くする

者にあければ鶴次も之には望を置かず閑々と歎へんものと思定めて居たりしを小初に藝に堪能あり浮かれぶし流行歌の數とそ無けれ諸流の段物酌し物に今時の藝妓に勿体なき程習得却つてあんて當八拳是等の事に不馴れにして万づ鶴次が意表に出たり

第十八回

小初に素より器用の質藝妓鶴次が指南によりて端唄流行歌浄瑠璃のさはりまで日おらずして一通りに覚え拳打つ手振りも稍上達せしより其翌月の始め披露目手拭の染上げを待ち名も小鶴と改めて鶴次が家より藝妓に出しが藝や程に深く尋ねず綱姐はしき顔意氣よきちんと極つた姿に忽ち府下の評判となれり

藤子ハ此花幸吉が御自慢の細君世の中の男冥利ハ我一人呑貪て立てりと幸吉ハ鈍かに誇り南北新地堀江新町但しハ祇園先斗町鐵の靴踏破るまで尋廻るとも藤子に勝る美人ハあらじと固く自から取極めてその後ハ花柳の巷に絶えて足を容れざりしが此頃鶴次の妹分にて難波新地に披露目せし小鶴といふハ稀代の美人と餘り評判高けれバ幸吉暗に心惜く如何なる女か試みに招いて見んと思ひ或る日商業演説會の歸りがけ久々にて芦の家へ行き先もつて鶴次を招けり二人ハ素より相識る中

「アラマアお珍らしいぢやアありませんか」來るあり早々鶴次が挨拶相變らず盛んだね「好くマア道を忘れずよお出あすつたと皆さんで何あにお噂をして居ましたらう」嘸悪口をきいたらう當りましたよ、もう〳〵さん〳〵悪口を云つて居ましたので

すが貴郎だつて餘りでさアねへ、何ぼ美しい夫人さんが入らつしやつたからといつて「左様々々見限つたもんぢやアありませんか溢れかへる笑顔を包み「夫人さん、ッン、そんなものがあるものか「イーエ知て居ますよ隠したつて不可ません先日ハお芝居へ入らつしやつたとねへお樂しみ、其時貴郎誰ぞに逢たでせう」誰に「あれマア嘘ッとばけて憎らしいこと大層彼の妓が怨んで居ましたよですがお奇麗お方ですとねへ「ハテお誰に逢つたらう口が多くて分りますまい「久しぶりで來たものをそんなよ奇責あくても好い「たんと苛責て上げます上「先一つ献さう「オヤ口留めに「時にお前の處から大層別嬢が出たさうだね「ハア一人出しましたから何ぞ是非御愛顧よ「頗る評判が好いぜ今日でも近附きにありたいもんだ「何致して貴郎見たやうよ奇麗お夫人さん

を持て居らつしやる方にはお目に掛けたつて駄目ですが是非一度呼んで頂かないと當人も場所に出た時肩身が狭くていけませんから「今日は居ないか「何處でお約束があつたやうでしたがまだ慥か居ますでせう鳥渡でも、御挨拶にと云ひつゝ仲居に其意を含む「非常に流行るさうだねへ「マア有難い事よ皆さんが御愛顧におすつて下さいますから何か斯かお茶も挽きません「生れは「東京です「年は「十九でせう「今度始めて出たのかね「ナニねへ柳べしで小初といつたんです「小初、成程聞いたやうな名ぢや御存じかも知ません「サア何か知らんあゝして時々東京へ行くといろんな人に誘はれて柳橋遊へも出掛るから「併し東京よ居た頃とは總て店を出し直して豆腐と石程違ひますとさ、此問も東京から居らつしつた或る貴顯な方が人も違やア違ふ

のだと好く〳〵感心あすつたんです「當地へ來てから豆腐みたつたのか「イヱ石に「姉さんに似て表面だけ堅いんだらう「あれマアあんな悪い事を併し申戯はいてはんとうに困るんですよ、餘り堅くて野暮くるしくて、貴郎少し云て聞かして頂戴なア〳〵心配したまふな出たてはは其位でも追々丁度好い程みある「折から表の方に當りて駒下駄の音響けば鶴次耳を傾けて「アヽ來ましたよ「否味なる幸吉衣襟繕ふて居る程なく入來りし小初が顔を一ト目見るより驚く幸吉此方もはつと思ひながら其色見せじと頭を下げ作聲して「今晩は

第十九回

昔根崎村なる浪華屋の窓い隠居幸兵衛が老後の樂みに充てんとて購ひたる靜閑の住居にて其身一代に殖やしたる財産の三

つ一を此の寮に掛けしといへば普請の結構物好きを極め殊に庭園の如きさほど廣しといふにはあらねど何某の宗匠が設計に基き主幸兵衛の嗜好を加へて名高き庭師の手に成りしかば草一本石一つも配置苟且あらず月花の風情に云ふも更なり殊竹に風しぐれ緑陰に泉滴りて夏の日の暑さを知らず爐邊火燵かあり茶を煎酒を煖めて冬の夜の寒さを忘る斯る樂しむべき寮あれど幸兵衛が隠居して後此處に住みしは丸二年の間にて病發りしより月も花も何のものかは片時も我子の傍離れずして顔見、見らるゝが此上あき樂みとあり寮番を置て本店に立歸りし後はうたてや幸吉が政黨の俗輩秘密會議相談會などは強の場所ありとて折々此處に打集り青蘚を鞋先にかけて踏にじり吸殘しのシガレットに爐緑疊は焼焦だらけ唯荒るゝまゝ

に住荒らしたり幸吉が御自慢の細君は此程より病に罹りて兎角心地勝れずといふ幸吉は深く憂ひ斯く煩はしき家に在りては治療も思ひの隨あらず寧ろ曾根崎の寮に移り心長閑に養生せば病も早く癒ゆべしとて例の娶やのお歌を附けて出養生をさしめぬ

五月雨の空晴し晴れて花壇の菖蒲色艶々し藤子は庭に居り立ちて垣に鄰ふ蝶を捉らへ池に躍る魚に餌飼ひて餘念なく見ゆる中にも屢々垣根の外を眺め折戸の方へ意を注くるは怜がら待つ人あるに似たり、實に藤子は人を待てり、そもこの美人に待詫びらるゝ果報者は何處の誰ぞ、程もあらせず草履の音忍びやかに聞え垣根越しにちらと見えしは古びたる手拭に頬冠りせし人の頭藤子は急ぎ戸を開きいとしほらしく打笑みて伴んの

人を近く招けり招かれて立寄る人い見るもいぶせき襤褸を纏ひ踵の切れし草履を穿き震へる足を踏めつゝ覚束なくも小腰を屈め頬冠りせし手拭取つて藤子に向ひ慇懃ゑ「是い〳〵夫人さまでございますか、昨日い有り難う、御蔭で誠ゑ助かりました」と云ふに藤子い言葉優しく「而して懼も少しい好いかへ」陰さまで昨日より今日い心地も涼々いたし大きに宜しくありました」と言ひながら両眼より涙る涙れし拭ひ「昨日もお話しやした通り心得違ひな娘ゆゑ乞兒非人と零落れましても親娘の情い不思議なもの何かも一度廻り合ひ篤と意見を加へた上彼女ゑ心を入れかへさせ貞人間にして置いて狂ぬうち死あうと思ふ許かり繰日夜店ゑ出掛けてい多くの人さまに恥面曝らし尋ね探がした甲斐があつて漸つとの事娘ゑ逢ひヤレ嬉しやと思

ふ間もなく追手の者に引別けられ定めし東京へ去たであらう夫ならばまだしも好いが若し此方で警察へ訴へられいしないかと薄々樣子を聞いて見ますと未だ此の土地に居さうな噂不孝者はど可愛いとやら今頃い何して居るか悪い心い改めたかと思繼けて夜の目も合はず苦勞を致して居ります所へ不圖昨日此處を通つてお見掛け申した夫人さまい勿体ない事ながら貌容年齢まで其娘に寸分違はず一ト目見るより飛立つ思ひオ娘かと口の際まで出掛つたのを漸と堪へ此處い浪華屋さんの窓賤しい間めをした娘がかういふお家に居る筈い無い是が全く他人の空似と思返へして見ましたものゝ餘り好く似て居らつしやるのでなほつかしいやら悲しいから親や姿い似て居てる心の中い雪と墨あゝいふ方を産んだ親御い嘸お嬉しい事

で出らうと立歸る呼も明かずアレ彼處の垣根越し貴女に見恍れて居ります所へお姐さんが出て參つて小言をヤされました時一任間違つたらお詫びをするまで念晴らしに聞いて見やうとお姐さんにお尋ねヤして貴女の御素性を委はしく知りドレお暇と立掛つた時お情深い夫人さまいろ〳〵と御親切よ仰しやつて下すつた上藥代にとお金までお惠みに預かりました其お禮をヤさう爲め今日ハ出ましてございます「病氣の好いハ何より結構、妾ハ兩親よ早く別れ平生父でも居て呉れたらと戀しう思つて居る所へ妾と似て居る娘さんがあると聞いてハあつかしい何ぞ又通りがけにハ顏を見せて下さいよ夫からあの欲しいものでもある時ハ遠慮あしよ左樣いつてね「お優しいお言葉嬉しく〳〵」涙の止度がございません」折からお歌の聲とし

て「御新造さまアノ兼吉が參りましたよ

第二十一回

お歌の聲よ慌かされ物乞の老人ハ藤子に暇を述べて去りぬ隣子ハ夫と名乘り難き父に名殘を惜しみつゝ僅かよ睡を返へさんとすれバ早兼吉後に立り御新造さま此頃ハッと忙しいので御無沙汰を致しました、而してお鹽梅ハ如何でございます「少しハ心持も好いやうだよ、夫より親父さんのお加減ハ「何にもお變りいでございません」此時まで椽側に立たるお歌「御新造さまお藥を此處へ置ますよ夫から御飯も出來て居ります」と言捨て立去つたり其後影見送りつゝ兼吉ハ手近ある庭石に腰打掛け「何だ今の乞兒ハ「妾のお父さんだよ」「エヽあれが汝の父さんか「左樣あの妾等が逃げた跡で柳ばしから追呼が來たとさ、其追手が親塊に

合ひたらうといつて大層苛責たもんだから昔堅氣に腹を立て鍋釜まで賣つて仕舞つていくらかのお錢を遣手に渡し何でも妾を尋ね出して遣手よ引渡すといふ意氣込さ「今日始めて逢つたのか」「ナーニ昨日逢つたんだよ」「さぞ嘗ましくいつたらう」「誰に「汝によ」「おせ〳〵」「何故だつて汝に逢つたもんだから」「ヘエ可笑いねへ、小初の親の六兵衛が此涙屋の御新造に、此花幸吉の妻藤子に」「藤子で旨く通つたのか通らあくて何するものかね、而して」「お父さんの千日前で一度小初に逢つたとさ」「千日前で小初に、小初ッてあのお娘に、夫れぢやア今に生て居るのか生きて居るんだよ何でも遣手のものに出逢ひ捉つたといふ事だが當人も苦しまぎれ何も彼も打破ていつて仕舞やアしないかと妾や夫が心配だから急よ鳥渡出て來ておくれと昨日婆やに言傳した

のさ」「乘吉や太息吻」「左樣か、何してまた助かつたらう」「彼女の運が好いんだねへ東京へ戻つたか知ら」「お父さんがいふんでや未だ此方に居るらしいからお前さん探つて見て後腹の痛まないやう何とか思案をしておくれよ」「何れどうとかせにやアあるめへ」「家の首尾や上々だらうね」「旨く是迄いでまかしたが何やら店の春公人にも氣取た奴があるらしいから汝も其の氣で居るが好せ」「あの妾の化の皮が剝さうあのかへ」「ナニ其の方や安心だが泣と己等の怪しい中を」「油斷があらあいねへ」「此方がづうく〳〵しいからよ」「夫ぢやア此處へ來る事も成るだけ知れない方が好いねへ」「夫を知らずまいといつて己等アどんあよ苦しんだらう、今日も此近所まで店の用を拵らへてはんの序よ寄つた積り上」「妾も是から氣を附やうや」「併し家の且つくや餘程旨くでまかして

あるから先此分は安心だ「旦那といやア此頃から時々歸宅の遲いのは何處へ浮かれて居るんだらう」「否よ氣を揉むぜ眞逆心から悔抜た汝を捨て外の女に見かへることもあるまいからそんなに心配するよやア及ばぬ」「おやく乙うおいひあさるね見かへる者でも出來て呉れると斯して逢ふにも逢ひ易いから夫でお前さんに聞いて見るのさ」「夫ちやア其事も内々探つて見るとしやう」「お前さんもう歸るの先刻も話す通りの譯ぐづ〳〵しちやア居られぬ」「それも左樣だね後々の爲を思つて見りやア今辛抱をするが好からう」「若また用があつたならお母の名前にして銘と手紙を出してくんねへ」此時お歌は再び立出で「サア〳〵御飯が冷たくなります、兼吉も御用が濟んだら早く彼方へ歸らないとお店の方が忙しからう」「フン氣の利かねへお母アだ」と

兼吉は小聲で嘲ち「夫ちやア御新造さま御大事にあさいまし歸つたら何卒宜しく」

第廿一回

藤子を迎へ取りし當座は區會に病氣屆けを出しても浪華屋の閾三寸跨ぎし事なくいつも家に在りて藤子の心を樂ましんとのみ願ひたる幸吉も不圖小鶴の評判を聞いて心憎く思ひ先の日商業演說會の歸途蘆の家に立寄りて小鶴を招き暗に藤子と見比べんとせしに此はそも如何に宛然妻の藤子にして歸來妻の藤子よ遲へ衣裝粧飾の異あるのみにて見し其儘の小鶴なり京大阪を尋ねて藤子及ばん美形はあしと平生思定めたるに遇ひ目の先に又一人勝劣らぬ美人を見ては男冥利を我が一身に背負て立んやうもあく必ず外に今一人の背負人ありと

思ふてゝ高かりし鼻何程か挫がれたる心地せしが慈深き幸吉他までも男冥利ゝ我一人專有し内よも藤子外にも藤子外にも小鶴内にも小鶴斯くて樂まゞ高き鼻いよ〳〵もつて高からんと茲に思案一決せり翌日ゝ少し早目に盧の家より鶴次を招き頻りに小鶴が事を賞め且つ最も氣ゝ掛けたる客筋の事品行の事我子の嫁に貰はん爲め素性を探ぐる親よもまして根掘り葉掘り問糺せしに東京に在りし頃ゝいざ知らず此地にて披露目せし後ゝ深く身を謹しみて雜魚寢一度したる事なくさりとて客の貴きと賤しきと金の多きと寡きとに因りて待遇に厚薄なければ如何なる客も愛顧にせぬゝなしと云へり、幸吉ゝ大いに喜び是より頻りに小鶴を招き情の糸のより〳〵に愛を繋ぎ心を引き男冥利を極めんと謀りしが小鶴ゝ他の客よつれなきは

と幸吉にもつれなく鶴次が非常の盡力にて此の程一夜雜魚寢せしが小鶴ゝ終夜鶴次が側にぴつたり寄つて身動もせず其の堅き事石の如く冷やかなる事氷の如くなりしかゞ流石の幸吉さへ一句戲れたる言よ及べず空しく其の夜を過せしとぞ、斯程無味冷淡なる仕打ゝ自慢れなる區會議員を深く失望せしめしあらんと小鶴ゝ窃かに喜びしに思ひきや此事より一層熱心の度を增さしめんとゝ賀に小鶴を愛顧にして足繁く通來る數多き客の中にゝ慾もあり慮もあり情をかけ惠みを施すと見せて啃に嘲を鳴らし爪を磨ぐ者も少おからず彼の折ゝ斯ありし此時ゝ爾ありしと小鶴が一言一行をもつて互に相誘る中浪華屋の主人此花幸吉に小鶴ゝ雜魚寢を許したりと傳へし時ゝおかあかの評判にて幸吉を知る茶屋や藝妓ゝ賀を致し慶を述べ早

是のみにても鼻高き事幾層を加へ幸吉が此道の名譽の區會議員當選の折に比して數倍ありしより今の義理よりも意地づくにも小鶴を思切るべき樣あく是までの藤子に五分小鶴に五分の意を用ひしが今日此頃の七分小鶴に力を傾け居たり

中の島清風樓の裏二階照る月の影さやけきが故燭蛍の座敷の隅にとき過られ客も藝妓も欄干に倚りて月を賞し風を愛す「オイ小鶴、お前も着物を着換へたら何ぢや」「姿の是で澤山です」「鶴ちやん、お着換へあ折角旦那があゝ仰しやるから」「姉さん是で好いんですよ」「夫ぢやア少し先へ寄て涼んだら好かろう」「此處に居ても涼しいんです」「旦那ほんとうよ困りますねへ、是でも貴郎に出た時いまだ餘程打解けた方あんです、外のお座敷に行かうもんあら夫い〳〵世話が燒けて」「ナーニ左樣ぢやアあいだらう、已の

の座敷へ來た時だけ喰付かれでもするかと思つて怖がるのに違ひあい」「アラ旦那そんな事いあいんです」「何だか知れませんねへ旦那、左樣でおけやりアお着かへあ矢張着かへる事い出來ませい」「ぢやア着かへますよ姉さんまで一緒にあつてほんとうに憎らしい」小鶴い僅かに浴衣を携へ次の間へと立て行く

第廿二回

彼云はゝ厭はれんか斯していい嫌はれんかと一言一行も苟且あらず心を附けて言ひもし爲もす幸吉が辛苦經營僅かに小鶴が塵を去りし時のみ氣も心も安く平らかにして言ひたいまゝに云ひ喰ひたいまゝに喰ふことを得「東京に居た時い隨分新聞屋の厄介にあつていろ〳〵意氣張あ事もあつたらしいが何故あ堅くあつたちう、内々卿が差圖をして客をぢらす計略ぢやア

あいか、若左様おら大抵にして置くが好い「何も爰にも合點が行きません、併し他人い兎も角も涙菲屋さんとを云れる貴客がいつかの晩あれ程よ骨を折て漸と雑魚寝をさせましたのにむざむざと夜を明かすおんて貴客よも似合あい、些としつかりおさいあねへ「こりやア恐れ入つたダガ宛で撮のやうだもの當つたら弾き戻りさうで打附かる氣にあられまかつた「何のかんのといひながら實い先頃芦の家へ彼の妓だけお呼あすつた時好話があつたかも知やアしあい「イヤ何も彼時位困つた事れおかつたせ、ア斯だ僕がいつを持て居る金剛石の指輪があらう「ハア夫人さんとお揃に拵らへてお出あさるの「お揃ひ、左様ヤアあれたよ、あれを彼の妓に遣うといふと姉さんよ聞た上で頂くあら頂きませうと眞面目くさつた挨拶さ「オヤあの指輪を、左様、何に

も妾にい云ひませんよ、あれを遣とお云ひあすつたのヤア〳〵遣つたものですねへ、夫をまた頂かあいといふとがありませうか、慾を知らあいよを程がある「先づ首尾よく指輪の分い恥をかいて引込めた、夫れから四條の納涼に行かう、宇治の螢狩に出掛けやう、須磨明石を廻つて遊ばう、石山の月見い何だ有馬の温泉も好い時候といろ〳〵彼の妓が氣に入りさうお條件付で獲議したが日歸へりあらお供をします餘所へ行つて泊る事い何分御免と逃げて仕舞つた「逃げさせるから不可ません上「夫ぢやア駒を頒はさう、若し其中の一つ叶ふと僕い何でも卿に驕る「膝立直して眞面目よ云ふを鶴次い月に顔打背け半ば笑を帶びたる聲にて「驕つて頂きたい事ねへ「イヤ申戯ぢやアあい何だらう行けまいか」鶴次い幸吉が問に答へず「ヤア何をして居るんだら

う、ちやん眠つてやアしまあいかへ「アラ杏姉さん眠てやアしませんよ何だか浴衣がぴん〳〵して鳥渡着られあいんですもの」と甘たるき聲よて答へ立ち出る姿を見れば浴衣おがらも帶だけは例もの通り端然とびたり「オヤ〳〵御丁寧に帶までびめて居たのかへ、年が若いとはづみが強いね」小鶴の姿を見るを均しく言ひかけた口を箝み喰ひかけた箸を擱きて幸吉は容を正す是より一座は樂しからねを樂しみに時移るまで月に對し杯を擧げしが漸くにして影も傾きぬ、幸吉は如何よもして第二の雜魚寢を取持ち呉るゝやう夫とはなく謎かけたれど鶴次は解くが如く解かぬが如く其中小鶴は衣裳を改め鶴次も歸宅支度をすれば最早幸吉力に及ばず思切つて坐を立上がり今や衣服を着かへんとする時一人の女中馳來り唯今お宅より此方が見え

旦那にお逢申したいとの事如何計らひませうやといつて一葉の名刺を出す、幸吉は名刺を見て「兼吉、ハテお何の用か知らん兎よ角此處へ呼んでおくれ女中が心得て立去る間もあく慌しげに入來しは浪華屋の手代兼吉幸吉は帶をびゝ鶴次に羽織かけさせながら「好く此處に居る事が知れた奇「へエいろ〳〵と聞合しして「何か急な事でも出來たか」何とおくうろ〳〵眼頻りに其邊見廻はしたる末懷中より一通の手紙を出して前へ進め先刻急な御用といつて此お手紙が參りました」小鶴は之を受取りて幸吉に渡さんとせしが何故にや手は震けり、其上書の名宛如何

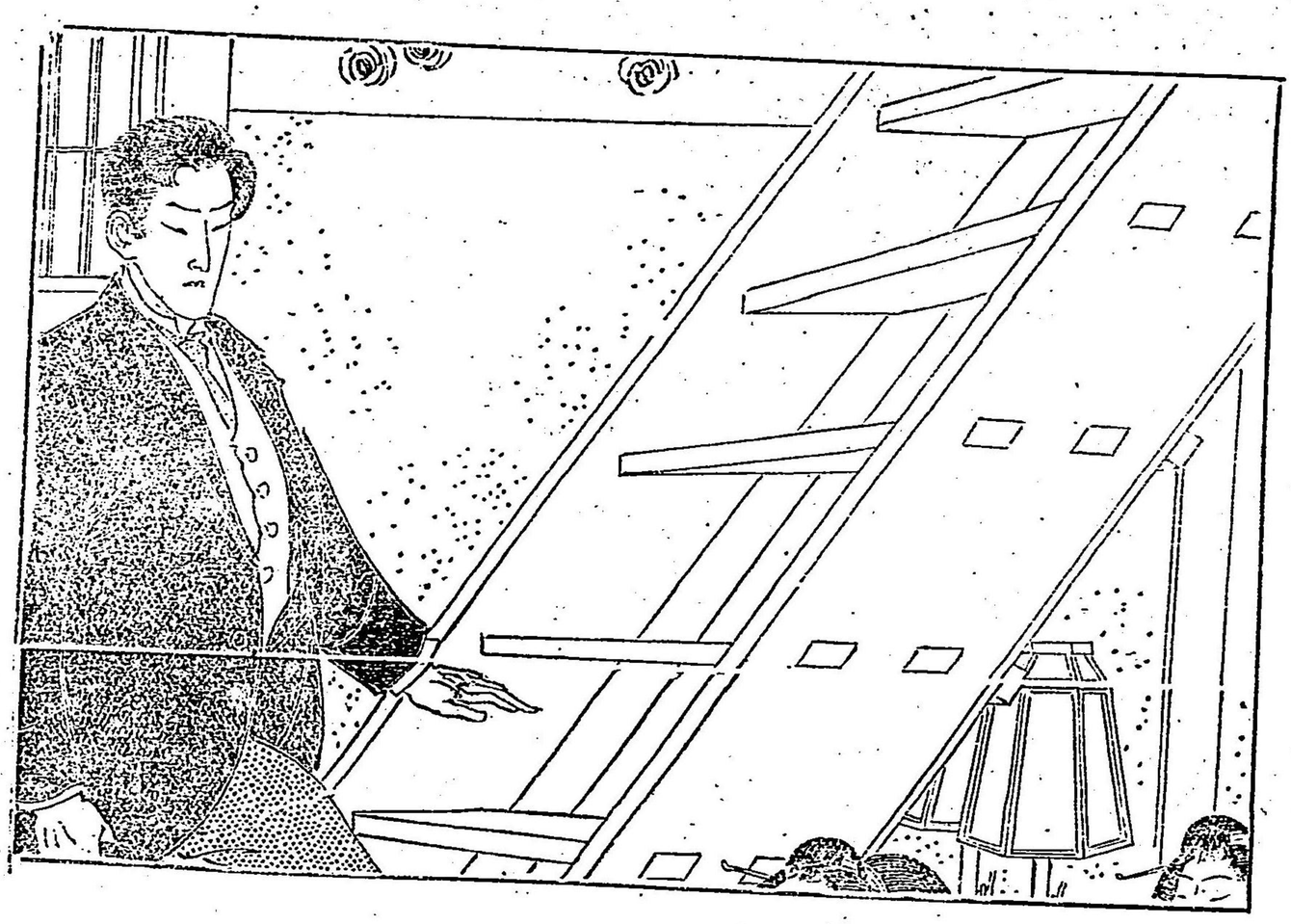
北花幸吉殿

室津一郎

小鶴が千辛万苦の元も畢竟今見し手紙の名宛室津一郎其人故あり、如何あれば幸吉と相識りて斯る往復をおすよや且へ疾く日本を發し歐洲へ赴ける筈あるに今此の手紙の摸様を見れば遠く寄せたるものゝ非すとさまく〳〵思ひ惱める間に幸吉い詞終り元の如く卷納めて袂に入れ手代兼吉に打向ひて唯一言簡單ある指揮「宜しい」

兼吉が立去りし跡幸吉い新らしきシガレットに火を移し「夫ぢやア去うか」今此の儘ゝ別れてい如何よして思ふ人の消息を探り得んと小鶴いいとゞ心を苦しむ「何した去あいのか」大屏落附て居る事ねへ」責立られて小鶴いよつとり「貴客好い方の處からお迎ひが來たといつて何もそんなに急があいでも好いぢやアありませんか、姉さん邪魔をしてお上げあさいよ」思切つて言出

せば鶴次傍らより唯立て「ヨーく感心、あゝ云いれちやア貴客だつてよもや此儘歸れますまい」挨拶さへもろくゝよせぬ小鶴が口より多情ある恨文何聞かんとい夢にも思掛ざりし幸吉い喜びに堪ず「是い冤罪だ此手紙い友人から寄したのさ」小鶴い秋波に幸吉の顏を見て「嘸やさしいお友達でせう」左樣々々思ひ入れ密めてお上げ「困るあ、是此通り男の手で室津一郎と書いてある具逆一郎といふ女いあるまい」夫りやアもう上表い男に頼んで書かせますのさ「ハヽア自分で覺えがあるから細かお處まで詮議をする「アヲ左樣ぢやアありませんいつも姉さんが「オヤ鶴ちやん妾が何したへ「マア何でもねへ「貴客當りましたでせう」幸吉い手紙を披いて小鶴が目前に投出し「夫ぢやア御覽、上も中も同じ手だから「ナニ見たかアありません受もせず」返しもせぬ間ゝ



小鶴い目早く見て取りしが其手紙の樣子にてい室津一郎の舊藩主小笠原伯爵其子息を遊學せしめんが爲め今少し出發の期を延べくるゝ樣依頼ありしかゞ五六ケ月出發を見合せ當分内地を漫遊すとあり是れにて樣子も概略知れたるに幸吉い尚懇ろに説明を附加へぬ「僕の故い友達さ、僕が十年以前東京に居た頃の友達さ其後い絶えて逢ひもしないが僕の妻や叔母あぞが世話よあつた男だから此節い近しくするが學問もあり智慧もありあか〳〵立派あ人物だ」小鶴い自身賞められしかの如く喜びの色面に溢る「何せ三日か四日の逗留その中にい何處ぞへ招いて酒でも呑して遣おくちやアあるまい」「何につけ彼につけ頻りに酒宴を催すも畢竟小鶴を見もし見せもし樂しまん爲めと思へゞ鶴次すかさず傍らより「何ぞ其時い願ひますよねへ鶴ち

やん」「是非貴客」「そりやァ聘とも」「而してあの何日」「場所と日だけい先方へ問合はせた上で知らして遣る」「吃度ですよ」「へゝ僕よりか卿達の方で約束を違へまいぞ」

幾春秋の花紅葉露霜に染かへても採の色い變らずして君が歸り待ちまわらせんとい勝子より室津へ宛て認ひたる別れのみ假令浪華屋に身を置かぬ如何ある艱苦を嘗むるとも高が三年の辛抱と氣を勵み心を勇ましして東京を出發せしに圖らず其身よ生寫しある藝妓小初よ出逢ひ今斯く姿をやつせし上い室津に逢ふも面ぶせあるがさりとて包み置かんやうあし寧そ明らはよ苦心を語り思惑の程も聞いて見んと思ひ明かせし其翌日幸吉が報告よ因り小鶴い鶴次もろともよ室津樓應の席に出ね

第廿四回

常にゝ物愛しと思ふ幸吉の迎ひも今ゝ待詫びしくいよ〳〵今日の午後三時より築地ある川竹へ來よとの報知を得れば いつも鶴次に急立てらるゝ小鶴手廻はし好く身仕舞をおし遊ばせに鶴次を促がし柱時計と晩競をして漸く時刻を待付たり、小鶴ゝ鶴次と車を聯つて川竹へ赴き暫し溜りよ休息する中室津一郎ゝ早來れり、二階棚子を上らんとする時室津ゝ思はず小鶴を見て深く驚きたるが如く小鶴も覺悟の上とゝ云へ流石に顏を見合はせてゝ何とあく心掛けり、前夜より小鶴が様子常に變りたる事ども多く時わつて憂ひ時あつて喜ぶゝ必定深き仔細ぞあらんと暗に心を注けたる鶴次今二人が擧動を見るより扨ゝ小鶴が東京よりありし頃相識れる中あらんと察し「鶴ちやん、お前あの方を知つて居るの」「ハア、ナーニ、知つて居るやうな知らぬい

やうな」「オヤ大層曖昧だ事ね〳〵」「何でも一二度お目に掛つたやうでもあり又左様でもないかとも思ひます」「鶴ちやん、お匿しでおいよ」「アラ姉さん何を」鶴次ゝ之に答へんとせしが外にも招かれし藝妓ありて其傍らに待居りしより強て小鶴を請らんともせず「大勢のお客だもの、一度や二度逢つたといつてあか〳〵恐え て居られやしないだが今のお客さまゝ大層奇麗な方だ事ね〳〵」ゝ云ふまでもなき事と答へたさをじつ」と忍び「左様ね〳〵、さうのやうでした

程なく酒宴始りぬ、小鶴ゝ杯を薦め肴を廻ぶるも能ふ限り室津の前を避けんものと力めたりしが酒一巡の後幸吉ゝ殊更に名を指して小鶴を前よ招寄せたり「室津君、貴君此女を御存じありませんか」心なき問も思ひある耳に聞けば霹靂の如く響たるよ

り小鶴ハ忽ち首を垂れ答へ如何と氣遣ひ居れり、室津ハ急よ一盞を呑干し「左様知つて居るやうでもあり、知らぬやうでもあり、確とお答へハ出來ませんねへ」「併し貴君も以前と違つて少しハお遊びあすつたらう」「イヤ少しも遊びません唯一年よ幾度か同窓の親睦會、留送別の宴會よハ大抵缺さず出掛けますから何かすると此んな人にも知つた顔があるんです」「オイ小鶴、何をぼんやりして居る室津君是ハ大阪第一等の美人です」「おか〳〵美人が居ますあア」室津ハ冷淡に答へたり、幸吉ハ藝妓を促がし頻りに舞しめ歌はしめて興を盡さんとする中も小鶴が心ハ室津に伴ひ絶えず容子を偷み見るよ室津ハ酒を飲んで醉ひ歌を聞いて樂しみ敢て聊かも心に關るものあきが如き、小鶴ハ稍心に恨めり、斯る苦勞も君ゆゑあるぞ、君ハ未來の妻が身をいとをしとハ

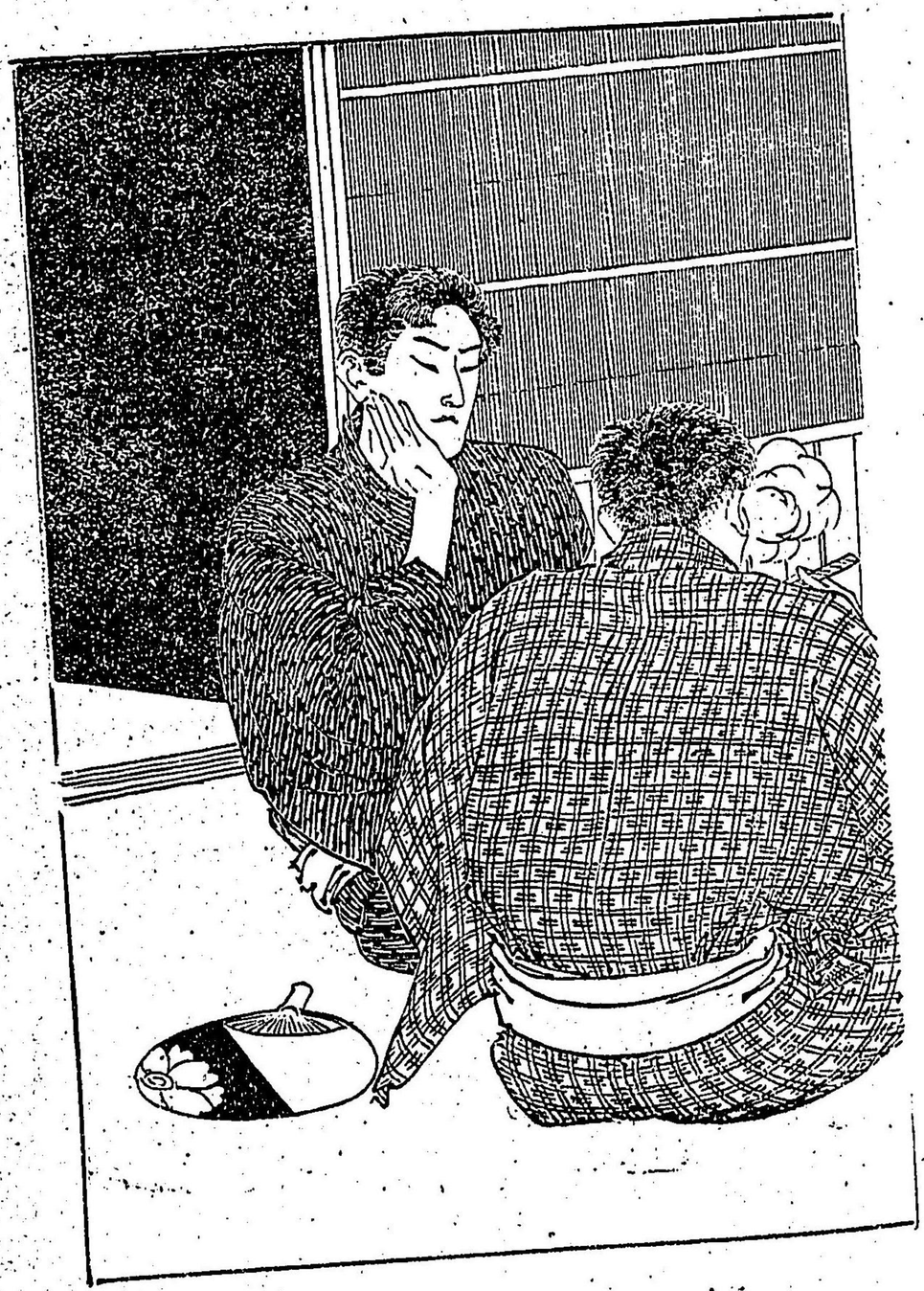
思さぬか、眼前妾が苦痛を見つゝ酒を飲んで味好きや舞を見て心樂しきや、但し藤子ハ何處までも浪華屋へ赴きたり藤子が賤しき藝妓風情にあり落ちんやうハおしと思極めておはするよやと自から問ひハ猶したれど自から答ふる處を知らず獨り心を苦しむる中室津ハ幸吉に暇を告げ歸去らんとする休あり「夫ならアお待ち申します」「一二ヶ所立寄つて直彼方へ參ります」「勿論何かお泊りの積りで」「お勸めに任かせ御厄介にあります」室津ハ直ちよ二階を下る藝妓ハ何れも附添ひて玄關まで送りしが小鶴ハ思ひ堪へずやありけん突然室津が手に縋がりいと切なき聲色にて「貴客、誠に恐入りますが烏渡何ぞお待あすつて」室津ハ極めて冷淡に「私にかね」鶴次ハ早くも夫と察し小鶴に代つて進出で「少しあのお願ひ申したい事があるんですから烏渡

彼方まで入らつしやつて、サア〳〵外の藝妓衆へ宛裝つてお二階へ送來れる藝妓を去し室津を一室の中に伴ひ小鶴の肩を輕く叩いて鶴次も此處を立去りぬ、頓て小鶴へ容を正し「室津さん、貴客妾をお忘れですか」室津が温和なる顏へ此時非常の怒氣を發し「忘れて居る、忘れた方が好いでへないか」言捨て突立起かり取縋る間もあらばとそ勢猛く出去つたり

第廿五回

文學士室津一郎が江島屋一家の爲め極めて親切なりし事へ此花幸吉も傳へて聞けり、されば最愛の妻が恩人其身も曾つて相識れる中、今より親しく交らん事へ幸吉に取つて名譽なり利益あるより此頃俄かに音信を通じ來さも親しかりしかの如く藤子の緣にて近親とありしかの如く振舞ひ室津が洋行の噂一

度新聞紙上に載せらるゝや先もつて祝辭を致し夫より東京出發の迎速を問ひ神戸滯在の長短を尋ねおどして交際を求むると力めたり、室津も許婚の藤子が爲め從兄に當る幸吉殊更歐洲留學中へ藤子の一身を託して置く將來の親戚あるにそ書狀の遣する毎に答へを贈りて深く厚誼の程を謝し尙出發の期延びたるより內地の漫遊にことよせて幸吉を訪ひ藤子を尋ねんとわざ〳〵此地へ來りしあり室津へ昨日着するや否や浪華屋へ手紙を遣はして來着の趣を報じ其夜早速幸吉が音訪れ呉れし答禮として今朝浪華屋へ赴きしが肝腎の藤子へ病に罹り養生の爲め先頃より曾根崎の寮に在りとて速かゝ相見る能はずさらば其處ゝ尋ねんとも流石言出し兼ねたる中幸吉に勸められて心あらずも乘地ある川竹へへ行きしあり、室津へ小鶴が恨み



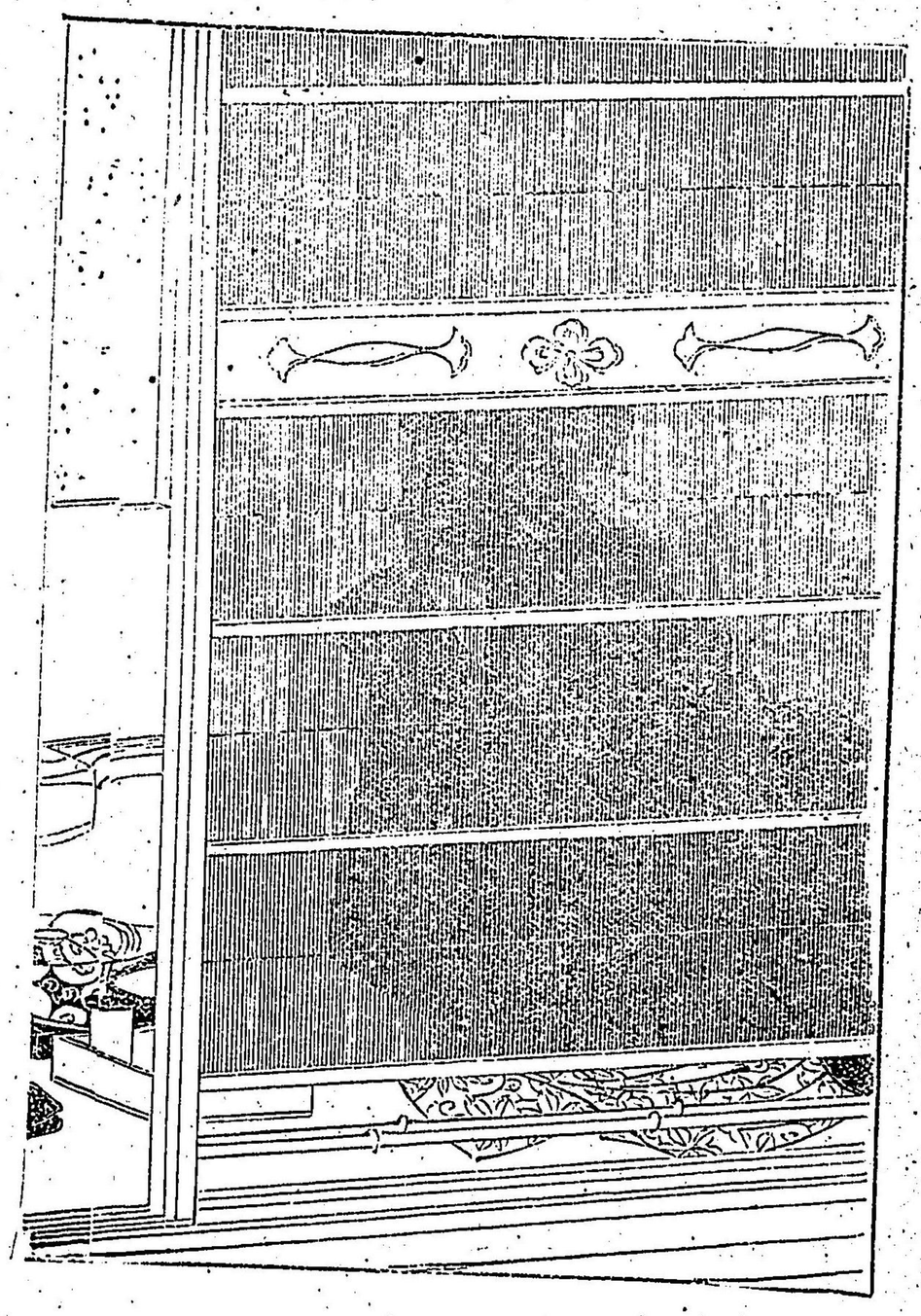
し通り此夜酒を飲んで酔ひ歌を聞いて楽しみしやといふに是
れ小鶴が傍目にて其實非常の憂苦を抱けり幸吉れ室津よ對し
何事を語るにも藤子を指して妻と呼べり、幸吉が以前より藤子
に心ありし事れ室津も豫て聞き居たるがさりとて藤子が嫉ひ
のみれ語じて忘るゝ事あし、何が故よ幸吉れ妻と呼び藤子れ妻
と呼べるゝか、已みおん〳〵女れ心弱きもの必定呼ぶ譯のあれ
べとそ呼べるゝ譯のあれべとそと且つ怒り且つ恨めり
亜暑の頃及より手を引連て相親しみ今れ互ひよ夫よ妻よと心
よ許せる江島藤子れ今宵室津が傍らに侍り杯を把り酒を勧め
しあり、室津は小鶴を誰と見し、送別會の第二席金波亭の裏座敷
一睡の夢の間よ三百金を奪ひ去りし柳橋の藝妓小初れ容貌音
聲まで宛から藤子よ異おらずと今尚記憶したるが上幸吉れ酒

宴中小鶴が履歴を屢々説き以前れ東京柳橋にて小初といひし
者ありとまで自慢心に吹聴せしかば室津更に疑はず扨とそ前
回記せる如くすげおくも振捨てしおれ
南地通ひに暇あくて二三日寮へ無沙汰せし幸吉、折詰の土産を
出して恐ろに病を防ひ「今夜れ大層顔色も好いのう、ハヽア髪を
結つた勢だらう時よ今夜れお客があるよ、オヤ何誰が入らつし
やいます」室津君が來る、お前も嬉しいだらう「室津さんッて何處
の方です」何處の方お前が世話よおつた室津一郎さん」室津そも
如何ある人あらんかと思案にくるゝ程もあらせず車輪の響門
外に至り留る「婆や座敷へ燈火を附けて」幸吉れ玄關に立迎へ室
津を延て座敷に伴ひ「存外お早かつた僕も歸つた許です」早く用
事が濟ましたから「夫れ幸ひでした今朝お話し申した通り妻も

少々頃つて居ますが今夜ハ大きに宜しい方で、コレお藤、室津さんが入らつしやつた」次の間に向つて呼べバ部屋に入來る藤子病氣ありといふに似ず顔も姿も艶々しく別けて室津の眼よつきしハ今朝結ハせたる丸髷あり衣ハ心の弱きものと賤しむ色をおし包み鄭重に禮をすれバ藤子も恭しく禮を返へす、得意あるハ幸吉の為「室津君も御出立が延びたさうな」「オヤ左樣で」「室津君に教へて頂いた美酒あゝも忘れたらう」「もう全然」「婆や珈琲ハ何した、ナニ牛酪の鑵が明かあいバレ己が明けて遣らう」幸吉ハ次の間に去る二人ハ凡そ廿分間默然としてさし向ひしが遂に藤子ハ口を開きて「朝晩ハお涼しうございますね」「左樣、此方ハ蚊が多くて困ります」「サウですか」「夫よ夜ハ淋しくて成る程」いつ洋行をおさいます」「まだ確と分りません

第廿六回

「忘れて居る、忘れた方が好いでハあいか」「是ハそも何たる言ぞ、藝妓とありしを憤り斯ハ情あくもてあすにや、誰が酔狂に我から好んで愛き川竹の淵よ沈まん、何が故に藝妓とハありし唯一ト言問ひもせず、別れて三月經つや經ぬよ許婚の妻を忘れんとハ心強きも程とそあれ、何が故に忘るゝ何が故に忘るゝが好きぞ、男ハ兎角つれなきもの、忘るゝ譯のあれバこそ、忘るゝが好き譯あれバこそと思詰めてハ堪へかねツツと許りよ泣叫したり如何なる首尾か氣遣ハしく鶴次ハ窃かに窓外に來り内の樣子を覗ふ中此の泣聲に驚かされ立入り見れバ客ハ居らず小鶴ハ獨り何事をか深く悲しみ居る体ありされど仔細を聞くも語らず其の夜ハ問もおく歸宅せしがさま〳〵の忘想ハ夜一夜小鶴



が胸裏に往來し翌朝より至りて病める者の如く氣抜けせしものゝ如く、顔も洗はず眼もせず況して食餌することもなく茫然として時々太息し愁然として涙を垂る「鶴ちやん御飯が喰られないから玉子粥でもたいて上げやう」「アラ姉さん好いんですよ今に御飯を頂きますから」「今に〳〵といつてそう頓て晩の御飯を喰る時分だのに未だ一度も喰ないちやァないかね、鹽梅が悪いから横町の醫師さまに見てお貰ひな」「ナニ何ともありません」「馬鹿らしい事をお云ひでないよ、顔といつたら眞青にしてお飯も喰られない癖に何ともないと云ふことがあるものかねお前い何ともないくても妾が心配だから鳥渡一杯喰てお呉れ」「厭ぬやう物食も頻ふて藥呑むも命大事と思へばあり、望あれば命も大事樂しみあれば死をも厭ふ樂しみ逝き望み去り何を的に生存らへんと

い云へ恩ある鶴次をして徒らに物思はさんと罪いと深し、約束の年期勤上る迄い我身よて我身にあらずと思返して笑顔を作り「夫ぢやァ少し喰て見ませう」「アヽ何ださうしておくれ夫からしつと寝て御覽」だつてもお座敷の掛る時刻ですもの「そんなよ體の悪い時出るよい及ばないわね、二三日樂をするが好い」「ちつとも悪かアありません夫れにまた、お座敷へ出ると氣分が變つて好いんです」「折から恰も迎ひ來る鶴次い病氣ありといつて斷らんとおしたるを小鶴い強て往くべしと答へ」「鶴ちやんかゝ慮しよ、妾が心配であらないから」「大丈夫です案ぜないで居て下さい」「夫ぢやァ譯をお話しな」「オヤ譯ッて、何の譯です」「顔の色の好くない譯を、昨夜の川竹の一件を」「姉さんあの事あらいつれ其中話しますから何ぞ浪華屋さんにい内々に」「何であの方に話す

ものかは「ナーニ語らあい事なんですよ

小鶴い程あく食事を畢り鶴次が強て留めるも聞かず身仕舞もそそくにして出行きしい例の芦の家客といふい此頃の晩酒風樓よて相見たる浪華屋の手代兼吉、小鶴を橋上より突落して害せんとせし曲者あり、兼吉い眞の小初今の藤子が計によりて眞の藤子今の小鶴が無事なる由を傳へ聞き驚くとと大方あらず其折主人幸吉がうき身をやつす婦人の事も探り見んと約したるより室津の手紙を種にして突然遊興の席へ行きしに居合はす藝妓の其一人い容貌より音聲まで情婦小初に露違はねば扨こそ藤子と思ふ付け主人がしげく通ふ女も又是ありと知るからにいよくく心も心あらず、今宵い自身小鶴を呼び暗に氣を引き様子を探ぐり其上再び思案もあらんと斯くい小鶴を招

きしあり、兼吉いさまくに試みし末小初が何處までも換玉たるを顯はさず且幸吉に從いぬ事を話し振りにて察し得たれば稍安堵の思ひをあし今宵此處にて逢ひし事い堅く主人に包みくるゝやう口留めをして別れ去れり

第廿七回

行く人の袖に縋らず門にも立たず唯うろくと徘徊し幾度か意地悪き料理人に水浴せられ棒振舞されつゝ伺芦の家の四方去らず立まよふ一人の乞兒折から芦の家へ立入らんとせし浪華屋の兼吉門口にて懷中ある一通の手紙取落せしに心付かず其儘足早に歩入るを前の乞兒い立寄つて件んの手紙拾取り小首ひねりて表書をつくくと見てありしが頓て自身の懷に納め横町の角を少し廻りて街燈の下に立ち往來の人の絶え間を

窺ひ手紙ひろげて見かけたるが抑も何事の認めあるよや一句一句讀む毎に太く驚き或時ハ總身震ひ戰きて怖るゝが如く或時ハ眼を瞋らし齒を切つて怒るが如く繰繙げ卷納め二度三度讀みし後元の通り懷ろよ入れ更よ芦の家の門を往つ戻りつ人待ち顏に見えたりしが此の後凡そ二時間を過ぎて兼吉ハ歸去り遲ろゝと十分許芦の家の店に挨拶して立出る小鶴の影夫と見るより彼の乞兒ハ塀よびつたり身を寄せて五六間遣り過し悟られぬやう靜々と小鶴が跡を跟けて行きしが往來の人の且絶えしを見て乞兒ハ急に足を早め追絶るよと思ふ間に小鶴が襟首むづと取り悶容搦も荒々しく大地よ捻臥せ聲を震ハせ「己れ惡黨まだ了簡を改め居らんか」と言ひあがら丁と擊てば意外のことよ驚く小鶴一生懸命跳起れば「ヤイ己れ逃やうといつ

ても逃がしんせん」と又も組付く其人ん千日前にて逢ひし物乞藤子としてん聞れおき亂暴狼藉腹も立てど小初更め小鶴としてん情の笞恩愛の責め元の藤子とあらば兎もあれ小鶴を名乗る上からん乞兒あれど假りの親と思へば胸を撫さすり「逃げも走りも致しませんが一体妾に何落度が」と云せも果てず懷より先の手紙取出しつゝ「知るまいかと思つて何程己れがとぼけてもお此方にん證據があるわいいつぞや計らず千日前で逢た事ん逢つたものゝ開分けのあい追手の衆に引分けられて思ふさま愚痴や恨をいふ事もあらず別れて仕舞つた其後ん大方泥棒をした科でお處刑を受けたであらうが年ん長いか短いかと不孝者でも我子ん我子案じ暮らした今日此頃南で流行る藝妓の小鶴ん元東京柳橋の小初といつた女と聞き切ん来だに此方

よ居たか夫とも若しや人違ひか何にしろ一度逢つて好く様子を探りたいと心を付けて居る中よ先刻芦の家の客人が取落した此手紙上書いさまめる御存じよりとしてあつても見覚えのある娘の筆悪い事とい知りおがら紡と披いて讀んで見ると大それた悪事のかず〳〵好くも宛名の情夫にお藤さんとやらいふ娘を浪華橋から突落したあ「エヽ夫れぢやアあの浪華橋から藤子を川へ突落したのい「オヽサ其事も今知つたまだ其上にお藤とやらい生きて居るといふ噂だから何とかして片附けたいとい殺さうといふ相談か、何をびくつくのだ、自分で書た手紙があから除り臆が太過ぎて我と我身が怖ろしからうまだ怖い事が書てあるわい、エヽと何ぢやその中旦那幸吉に酒を勧めて酔いせ南手の六畳に寝かし置きい間裏口より忍び一思ひよお殺

し下されいさずれで外より賊はいりい体に拵らへてごまかし其上い浪華屋の身代御互ひのものと成りやいか、幸吉とあり浪華屋とあるからにい心齋橋の浪華屋さんか、マア誰の事にもせよ人殺しまで思立つとい呆れ果てた大泥棒、已れがやうな人でおしをいつまでも生存して置くと世間のお人よ難儀をさせか上へいお手数をかける許り責めていい親が手に掛けて殺して遣から左様思へ」と言ひつヽ又も立かヽるを小鶴い急におし留め「夫程の悪人と知らずよ身分を取りかへたのい何處までも妾が誤り「何ぢや身分を取りかへた「マア氣を鎮めて聞て下さい、今迄い匿して居たか浪華屋一家の浮沈と聞いていい此儘にも見過されまい、實い其手紙の中よある江島屋の藤子い妾で浪華屋に妾に好く似た嫁さんがあるら筈です其嫁さんが藝妓の小初即ち妾

の身代です」是れ〳〵何を馬鹿げた事をいふそんな事があるもんか勿論浪華屋の御新造の手前よそつくり其儘だが若いよ似合はずお慈悲深くて毎度此の己にもお金を恵んで下さる方だ「サア夫が小初さんです其證據よの手紙の中よ浪華橋から入水したのを江島屋藤子として有ませう、妾が溺死する處を藝妓鶴次に救はれて生かへつたといふ事の誰でも知つて居る事ですから聞合はして御覽あさい」折から此處よ來かゝる人影正しく鶴次と見ゆるより小鶴の着物の塵打拂ひ「アレ今もお話しをした鶴次が此處へ來る樣子萬事の妾が引受けて浪華屋さんへも怪我のないやう工夫をして見ますから案じずにお出あさい先づ夫までの今の話を必らず人に知らさぬやう」言葉忙しく說畢りし時鶴次の早近づきて「鶴ちやんぢやないかへ

第廿八回

小鶴の物乞の老人を諭し彼の手紙を懷に納め鶴次に伴れて立歸り今夜人々の寢靜まりし後一ト間の中に引籠りて件の手紙取出し幾度とおく繰返せしが讀めゞ讀む程憎むべき奸夫姦婦が惡計の頓末斯る事のありと知つて假令赤の他人よもせよ打捨て置くべき譯あらず況して此花幸吉の現在の從兄に當り殊に我身の爲めとおりて及ぶ限り親切を致し眞實を盡して世話せしもの畢竟室津一郎といふ許婚の夫のあれゞこそ彼處に迎へらるゝを厭ひ我身の藝妓風情にあり落ち小初をして代らしめじが今此の惡計よ陷るも原を糺せゞ我身ゆゑ、若し看過よする時の江島屋藤子よ良人殺しの惡名を負いしむるのみが浪華屋一家の忽ち倒れん、そも如何にして救いんかとさまざ

ま案じ惱みしが翌日に至り小鶴に思ふ仔細やありけん得意の髪結に誂らへて成るべく不意氣に島田を結ハせ衣裳彼是と取出して成るべく高尚なるを選み支度悉く整ひし時「姉さん、鳥渡見て頂戴」と枕して小本讀み居たる鶴次起上がつてと見かう見オヤ〳〵何處のお嬢さんが入らつしやつたかと思つたヲ「お嬢さんと見えますかねへ「見える處か何したつて藝妓とハ思ハれないよ」「左樣、嬉しいと」「マアそんな風をして何處へ行くの、お客さまのお好みなの」「ナニ左樣ぢやアありませんが、姉さんお願ひですから今夜だけお暇を下さいな」「ア、〳〵好いとも、幸ひお約束ハあし何處へでも行つてお出で」「夫ぢやア何ぞ遣つて頂戴」一件の處かへし鶴次ハ笑ひながら問ふ、小鶴も同じくにつこりして「ハア當ました」「そんなら唯ぢやア遣つて上げない、何ぞ妾に驕つて

おくれ」「驕りますとも、澤山お土産を取つて來ます」「行く分ハ好いが又此間のやうな痴話喧嘩をおしでないよ」「アラ否姉さん痴話喧嘩ぢやアありません」「夫ぢやア何だへ」「ほんとうの喧嘩です」「オヤほんとうの喧嘩なぞハ尚いけないよ」「むづかしい事ねへそんなら中を好くして兎角喧嘩ハしないやうにしませう」「マア〳〵勝手よかしなさい人が好く眠りかけて居るものをわざ〳〵起して惚けなんか云つたりしてほんとうにお前ハひどいよ其癖人の尋ねる事ハ一つも話さないんだもの小鶴ハ忽ち眞面目になり「姉さん」「オヤ大層改まつて」「今夜妾が歸つて來ますと何も彼もお話します何ぞ夫まで待て下さい」鶴次を膝を立直し「ナニ妾だつて無理にお前の困す事を聞出さうといふのぢやアないがッと心配でならないから」「何にしても今夜歸つて委はしい樣子

を話します「夫ぢやァ車を云つて遣るから其間お御飯をお上り
ぁ「まだお腹が一杯です」「何せ向ふでも御馳走があるらしかから前
の心任かせにおし、慥に浪華橋向ふだつたね」と云ひつゝ鶴次ハ
女中を呼び出入の車を雇ひに遣る
小鶴ハ室津一郎を尋ねて今一應面會し彼の忘れたる次第を問
ひ忘るゝが好き譯を糺し乘てハ浪華屋の危急を告如何にもし
て救ふ術を相談せんと思へるあり

第廿九回

若松町の旅人宿柳陰亭の二階座敷ハ室津ハ獨り茫然として坐
し淀川の夕景色見遣らんともせず思案ハ暮るゝ折しもあれ一
人の女中入來り「あの大層奇麗なお嬢様が貴客にお逢ひなさり
たいッて入らつしやいました、此方へお通し申しませうか室津

ハ不審さうに小首かたむけ「ハテお何ぁの女か知「年ハ十八九で色
の白い身のすらりとした「人違へぢやァないか知らん」イーエ慥
かに室津さんと仰しやいました「左様か夫ぢやァ兎に角逢て見
やう」女中の立去し跡室津ハ座敷に取散らしたる荷物を床の間
へ片附け坐蒲團並べて待つ間程おく入來りしハ小鶴あり、室津
ハ夫と見て心惑ひぬ、前日逢ひし藤子ハ丸髷小鶴ハ意氣ぁ島田
を結へり、今見る婦人ハ島田こそ結へ衣裳裝飾ハ良家の令嬢、藤
子なるか小鶴なるか何れとも分き難けれど我に仇せる小鶴に
して尋來らんやうあけれぺ必定藤子と思込み先づ第一の挨拶
に「先夜ハ御厄介にありました、夫からッィ取紛れて御禮ぁも出で
ませんでした」扨ハ浪華屋へ赴きしか妾と小初を見違へしかと
心可笑しく思ひながら靜粛に手を仕へ「何致しまして「此花さん

ん相變らず御多忙ですか、何ぞ私に御用でもありますか「是非妾が身の上に就いてお詫びを致し思召しも伺ひたいと存じまして」暫まで聞かず室津一郎眼中に怒りを顯はし「お詫び、何もお詫びを受けるにん及びません又今日とおりましてん貴女のお身分の事に就き直接御相談ん致しかねます」浪華屋の花嫁藤子を其の藤子ありと思ひ暗ひを背むきし者として腹立てたる言葉の端々爾ありてこそ頼母しけれと小鶴ん深く喜びつゝ「室津さん、貴郎ん妾を誰だと思つて居らつしやる「お尋ねまでもおい區會議員、此花幸吉君の令夫人と思つて居ます」稍冷笑して答ふれば小鶴言葉に力を入れて「違ひます妾ん室津一郎君が未來の妻です「以前ん左様でありましたが「イーエ唯今も矢張左様です」室津ん笑つて空嘯き「此花君ん私に婚姻の事を知らせました」小鶴

ん膝をかし進め「如何にも此花幸吉ん婚姻致しました、併し江島屋の藤子ん決して婚姻致しません「コレ藤子さんもう宜しい貴女が、婚姻したからといつて今更わたしん苦情も云はん「宜しかアありませんか解りよ、なるまでん是非お話し致します貴郎ん浪華屋の嫁を私と思て居らつしやるねへ「貴女と思はんで誰と思ひませう「ソレ御覽あさい夫が大きな間違です、貴郎が此間川竹でお逢ひあすつた藝妓小鶴が江島屋の娘藤子で今此に居ます妾、夫から貴郎が浪華屋でお遭ひにあつた芸者の花嫁ん柳パし藝妓であつて小初と申した女ですねへ宜しうございますか今お話して居るのん南の藝妓小鶴といつて其實貴郎ふ幼さい時から一方ならんお世話にあつた江島屋の藤子ですその證據ん元の事を何でも尋ねて御覽あさいまし一々覺えて居ます

すから」繰返へし〳〵熱心よ述立てしより今い一郎半信半疑「何だか私よい分りませんねへ「そりやァもう孰らが孰らだか見分けの附かん程似て居ますから左様思召すも御尤ですが全くい相談づくで互ひに身分の取りかへこを致したんです」取りかへと言ハイ、浪華屋の親子い是非妾を嫁よすると申します妾も浪華屋へ参つた上拒む事い隨分面倒だから成るゝ為ら行きたくもいと思ひましたが外に貴郎のお歸りまで身を置く場所がございませんので據ろなく行く事よ取極め汽車に乘つて参る途中不圖藝妓小初よ出逢ひ二人が好く似て居ます所から戯らを思立ち荷物もそつくり取返へして小初い浪華屋の嫁よ行き妾い又渠が代りよ藝妓小初とあり申しましたまだお解りにおりません か夫とも是から御一緒に浪華屋へ参りませうか兎よ角藤子い

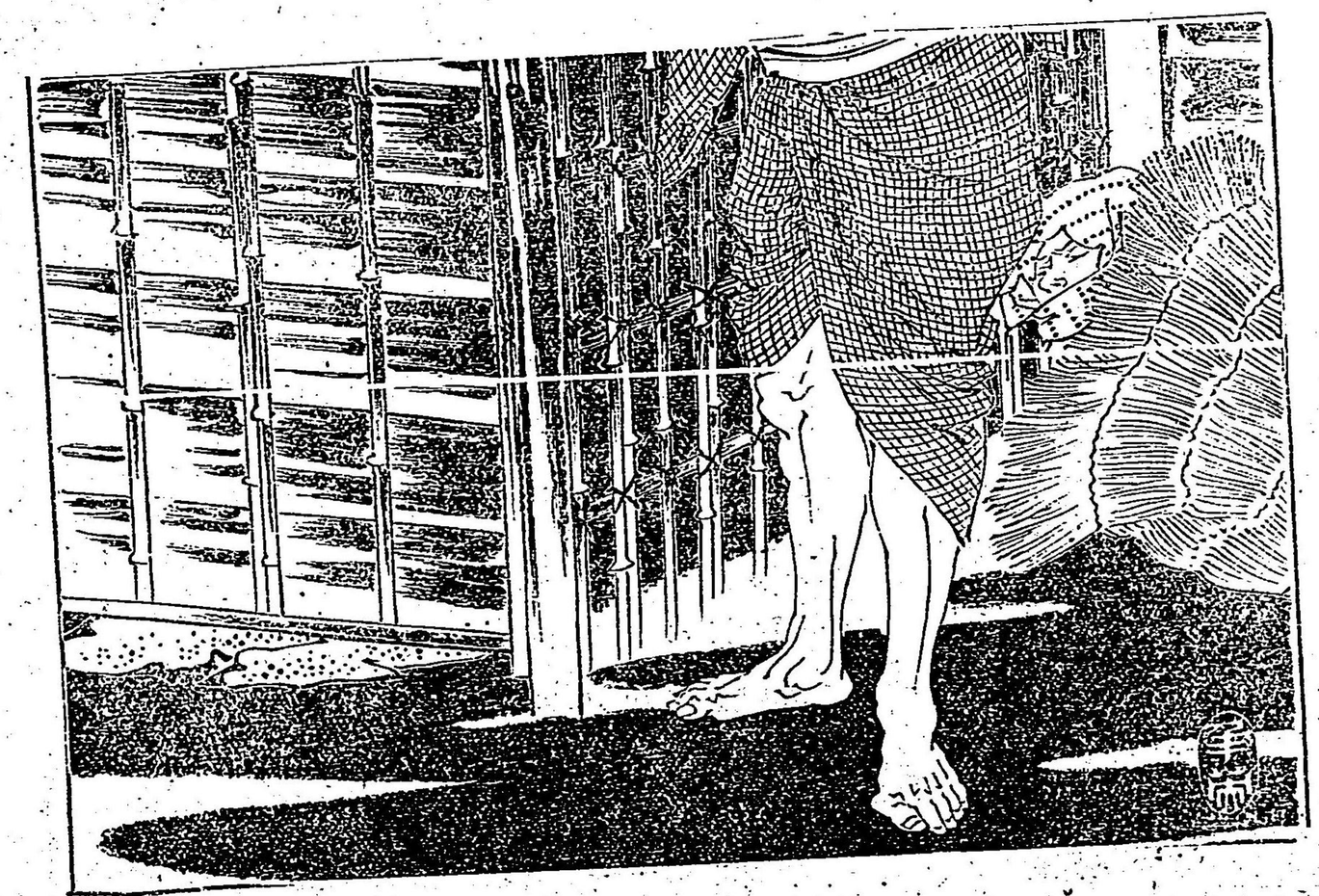
妾です貴郎へ先頃上げたみも今だよ文句を覚えて居ます、又貴郎から頂いた寫眞だけい小初に渡さず此通り持つて居ます懷中より寫眞を取出し室津が前にさし置きつゝ「妾がお詫びといふい浪華屋へ行くが辛さよ藝妓とあつた事あんです、又御相談と申すのい此みに書いてある浪華屋の一件と言ひかけて四方を見廻いし例の密書を室津に渡せゞ室津も委細の話を聞いて漸く疑晴れしと見え満面よ喜びを示し「實に不思議な事もあるもの夫ぢやァ築地の川竹で私が怒つたのい矢張りあの貴女だつたか、實い小初に三百圓金を盗まれた事があるので「エ、夫ぢやァ柳橋の金波亭で小初が盗んだ三百圓い貴郎のお金であつたんですか「彼まで何して知つて居ます「小初が爲めよい妾もいろいろお目に逢ひました夫い跡での事よして先づ其手紙を

御覽下さい

第三十回

藤子の病氣も稍癒えたり明後明後の中より本宅へ立歸るべしと申し送りしより幸吉い深く喜び此の日夕間暮寂に音訪れし處藤子いいつよおく機嫌よく婆やお歌に意を授けて酒肴誂らへさせ待遇ぶり眞實あり「永い間我儘をさして頂きましたが御陰で大層癒ありましたから今晩い妾が貴郎に御馳走致します」幸吉い久々にて細君の笑顔を見嬉しき事云はんかあし「左樣かへ、夫い忝おい、たんと御馳走にありませう「室津さんいまだお癒足にありませんか「まだ逗留して居るあれからお逢ひあすつたの「時々尋ねて見ても酒い呑ます而白い話いあし氣の詰る許でさつぱりいけあい「だつて貴郎好い人を呼で酒の相手をかさせ

あさると面白い事がたんと有るでせう」幸吉の顔をじろりと視き心ありげに莞爾笑ふ「何して〳〵而白い事があるものか家で呑むのが落附いて好い「夫ぢやァたんと召しあがれ今夜い妾も頂きます よ「ハ、ア大變元氣が好のう」斯る話の中に酒肴の用意出來夫婦い快く酒宴を始ぬ、幸吉い藤子が性質酒好まぬ事を知るが故よ曾て一回も勧めず小初の藤子い斯る事より化の皮見顯はされんを恐れ是までい堅く謹みしが今宵い久々よて大く過せり「貴郎、も少し召し上がれ「イヤもう大層酔つて仕舞つた、お前も大分いけたやうだの「心持が宜しいんで思はず澤山頂きました「ずつと前東京へ行つた頃お前の三味線を聞いた限りで夫からい遂に聞かんがもう大方忘れたらうお銚子の代り持來りしお歌「旦那さま何いたして御新造さまいちつとも忘れちやァ



居らつしやいません「アラ否婆や、嘘でございますよ、皆あもう忘れました「イヤ〳〵旦那さま、此間から御新造さまが嬉いで許り居らつしやいますから妾が三味線を借りて參つてお彈かしやしたんでございますが何致して忘れて居らつしやる所か何でも好く覚えてお出あさいます、サア御新造さま何か一つお遣り遊ばせ、ねへ旦那さま宜いぢやアございませんか「好の何のッて是非一つ聞かして貰へう、婆や其處に三味線があるか「マア、不可ませんよ、所詮妾あぞの三味線をお聞かせヤしても面白かアございません「何でも宜しい一つお遣り」婆やハ三味線を持ち來りて藤子の前に早つき付け「此間お彈きあすつたのハ清元の明烏でございましたねへ」藤子ハ否々三味線を受取り「知らないよ「明烏結構、ソレ先年東京でお前と一緒に芝居へ行つた時狂言ハ高

橋お傳髑髏か吉藏殺しの場ハ延壽太夫の出語りで明烏だつたら「左樣でございましたね、好く覚えて居らつしやることと「面白かつたから忘れやアしない「サア御新造さま妾も此處で伺ひます「困るねへ「少しでも宜しうございます、左樣致すと旦那さまが又何ぞ御褒美をお出しあさいます「そりやア出すとも、お望み次第だ」藤子ハ調子合ハせつゝお歌が方に打向ひ「はんのぽつちりだよ、此間彈いた先を「爪彈の音いろゆかしく小初の藤子ハ持前の仇なる聲にて歌ひ出せば、幸吉も心樂しきまゝ更に幾杯の酒を過せり

夜ハ靜かあり鳴く虫の聲だになきよ藤子が語る淨瑠璃の「男ハ兼て用意の一腰口にくわへて、と歌ふ頃寮の裏手に忍寄りぬき足さし足覗ふ曲者思いず其處に臥し居たる非人に嚇きよろめ

さあがら「チョッ行倒れか人よ膳をつぶさせやがつた呟きつゝ立去つたるいそも何者ぞ問い黒白あし

第三十一回

「ヨー〳〵、御苦労さま、實に好い氣持ちよおつた如何でございます旦那さま意氣あお壁ぢやアございませんか「マア何しやう婆やそんあに賞られると妾アヤが流るゾ「先年聞いた時とい大違ひ、夫程旨い癖よ匿くして置いて己等にい聞かざあいんだものの「だつて貴郎い上手あの許り聞て居らつしやるから「何して〳〵左樣いふ意氣あ壁を此地で聞うといつても所詮聞かれん「旦那さまお畑の宜しい處を差上げませう御新造さまも今お一杯「もう苦しい程酔つて仕舞つた「まづい三味線をお聞きあすつておも酒も酌めたやうですからもう少し召、上がれ「イヤ何も倒れさう

た「藤子いぐつと一杯飲干し杯を洗つて手に持つたまゝ献さうともせず幸吉が顔を見詰め「貴郎是から又何處ぞへ行つしやらうといふんですか「是い怪からんもう何處へ行くものかあア婆や泊つても好いんだらう「お歌い四扇にて蚊遣りの畑あふぎあから「オホゝお泊りよあつちやア悪いかも知れません御新造さまにお聞遊ばせ「藤子が手に持つ杯を受けお歌よ酌を取らせつつ笑つて最愛の細君に對ひ「何だ悪いかね泊つちやア「藤子を片頬に笑を含み「妾い存じません、誰かに聞いて御覽遊ばせ「誰に、エエ誰よ「南地の何とやらいふ別嬢に「イヤ是い冤罪だそんあ者い一向知らん「イエ〳〵旦那さまい大分此の頃お浮かれですから思入れいぢめてお上げ遊ばせ「婆までか味方をして己等一人いぢめてい困る「又貴郎のお味方をする人もございませう上「全体

何だつてそんなに苛責るんだ「だつて貴郎歸りだがつて居らつしやるもの「いつ歸らうと云ひました「今倒れちやアあらんと仰しやつたでせう、泊つていらつしやるお積りならお醉ひあすつても宜しいぢやアありませんか「左樣か夫れ恐入つたそんならもう「ドレ妾れ今の間にお床をのべて置きませう倒れるまで飲まう「ドレ妾れ今の間にお床をのべて置きませうマアお仲好く喧嘩遊ばせ」と笑ひながら婆やれ坐を立つ、實に幸吉れ藤子と對し今宵程打解けて樂しく感じたる事れあかりさされば勸らるゝまゝ杯を重ねて前後不覺に酩酊せしが暫くもつて婆やお歌慇しく馳來り「オヤ旦那さまれお眠たんでございますか何だねへ騷々しい今お眠た處だよ」御新造さま大變でございますあの御隱居さまがお危急いと申して唯今お迎が參りました「幾爻さんが、マア折の惡へエゝとんなに醉つて居らつし

やるのに、矢張お起し申さあいぢやア惡るからうかねへ「いくらお醉あすつて居ても御隱居さまがお危篤のぢやア何も仕方がございません」藤子お歌れさま〳〵にして幸吉を搖起し迎ひの車に扶け乘せ漸く送出せし跡二人れ幸兵衛が容躰を案じ「たんとお惡くあけりやア好いが「左樣でございますねへ、たんとお惡いあら貴姐よも何とか申して參りませう「使に聞いてれ見なかつたの「夫が貴姐聞きましてもさつぱり分らないんでございますよ、兼吉も彼方に居あがらはんとうに仕方がない皆あが周章て居るんだよ「大方左樣あとでございませう「何をいふよも永い御病氣夫よお年がお年だからどうも妾れ心配でありません打裝るゝをお歌れ慰め「アゝ偶に陽氣あお顏を見てヤレ嬉しやと思ふ間もなく飛んだお知らせが參りましたれ併し今にまだ宜

しい御様子が知れませうからマア〜お案じ遊ばさないで居ちつしやるが好うございますよ」此時更よ本店より一人の車夫来り「御新造さまよ直入ちつしやるやうお迎ひに参りました

第三十二回

幸吉が出去りし跡更に藤子を迎ひの車本店より来りしかばかの歌もいよ〜心を疼め共に行かんとおしたるを夜道おがら出入の車夫氣遣ひあらう譯もあし汝ゝ此處に留守してと言置いて車に飛乘り藤子い本店よ遁きたり、跡よお歌ゝ杯盃を取片附け表裏の戸締りをおし自身の部屋よ宛てられし四畳半の小座敷に蚊遣火を煙ぶらせつゝ主人の容体如何あらんと案じ佗びて茫然たる中覺えずとろ〜と睡みぬ

門に曲者が足に掛け行倒かと思りし乞兒彼げる狐を後にはね

て此時そろ〜と起上りしが渠ゝ曖昧たる足踏固め闇を探りて垣根に攀ぢい〜たびかこらんとしてゝ休ひ遂に見越しの松を足場に寂の庭へ忍入りてホット許り息をつき内外の様子窺ひおがら倘泉水を廻り築山を越え石に躓き木よ行當り辛うじて南手の座敷間近く立寄つたり、此處ゝ襲に幸吉が爲め臥床設けし座敷にて隅なる雨戸一尺餘り閉殘したるが彼の乞兒ゝ稍暫し内の様子窺ひつゝ何が獨り打合點き此處より座敷へ忍入つたり斯て一時間餘を經し頃又もや垣根に窺ひ寄りしゝ宵よ一度見えし曲者衣服の裾輕く端折り手拭眞深に頬被りしてひらりと垣を跳り越えぬき足さし足忍寄り前の座敷へ入るよと見えしが間もなく凡あらぬ物音聞え彼の曲者ゝ様側より庭へ飛出で再び垣を乘越えていつくともなく逃去りぬ

一壁の料喚にお歌い假寐の夢を破られ忽然として驚覺めしが正しく猫鼠の立騒ぐ聲に非ず怪しとい思へども隣に遠き寂あれば餘所の物音の聞えん筈あし近頃追落しの流行ると云へば往來にて害められし者やあると門の戸少し引明けて表を窺へど怪しき事あし立入りて時計を見れば早一時ゑ程近しいつ迄起きて蚊にせいられうつら〳〵思物ふとも主人の病氣に効もせじいでや諸所の戸締を見て假き今宵い最早臥床に入らんと手燭に火を點し先襲に幸吉の爲め床布のべし座敷へ行けばコリ如何に主人と代つて寐たる者ありお歌い太く驚きあがら怖る〳〵近き見れば四方に鮮血淋漓たりお歌いまず〳〵驚きつつ打かけし小夜着めくりて臥たる者の顔を見れば疲衰へし老人にて咽喉に一ヶ所の大傷を受け空しく息い絶果たるが紛ふ

方あく先頃より屢々藤子に惑せられたる物乞ひの老人ありお歌い且怖れ且怪みそも何が故に此處へ忍び乃ゑ伏して敢あく果しど狂氣ゑやあらん汚はしと見遣る彼處に一挺の出乃庖丁ゑり鮮血附たるからい是にて咽喉を刺せしあらん更に見る一通の書面表書にい浪華屋様へ書置の事とありお歌い急ぎ開き見るに墨淋くかすりたるが上震へる手にて認めしと覺しく字體くづれ行亂れたり

私い六兵衛と申ず小初が父に御座い小初まだ幼少の頃東京の去方へ養女に遣はしい處養家のおちめ是非あく柳橋の妓妓ゑ賣られい然ろゑ悪しき道に陥り易く小初い御當家の手代乗蔵吉どのと馴染めい末お客さまの金三百四銭み當地へ逃亡いたしい其の道にて江島屋のお嬢様ゑ出逢ひ貌容の

好く似いとところより悪心を起し兼吉どのと話し合ひお嬢さまを浪華橋より突落し己れとお嬢様となり代つて御當家へ嫁に入込み勿体なくも御主人様をお欺しヤし兼吉どのを引入れて不義を働さい上悪心いよ〳〵増長致し今宵彦主人よ酒をしひてお醉いせヤし兼吉どのを忍バせて殺害せんとの怖ろしき巧みのあらまし計らずも拾ひい密書にて承知致い問責めて御主人様の代りに生甲斐もなき命を堕し一つにい悪漢どもを懲らし又一つにい我が子の爲め御主人さまや藤子さまへお詫を致さんと車夫を頼み御隠居様御病氣と言立て御主人さまを御本店へお歸へし申上たるい私の計らひ御歸宅の後此處に忍び御主人様のお身代わり兼吉どのゝ及を迎へ相果てヤい娘事い是迄もさま〳〵の悪事相働い事ゆ

ゑ八裂きにありいても私に於て恨み無之唯現在の父まで手に掛け責めていまいに懺悔致し後世の罪を逃れさせ度是許り親の慈悲とおんヤ開け願上い南地の藝妓小鶴こそ真の藤子さまとも存ぜず毎度御無禮致しい段深くお詫びヤ上い先ヅい心せきいまゝ是しき書残し草葉の陰より御家御繁昌相守り可申い以上

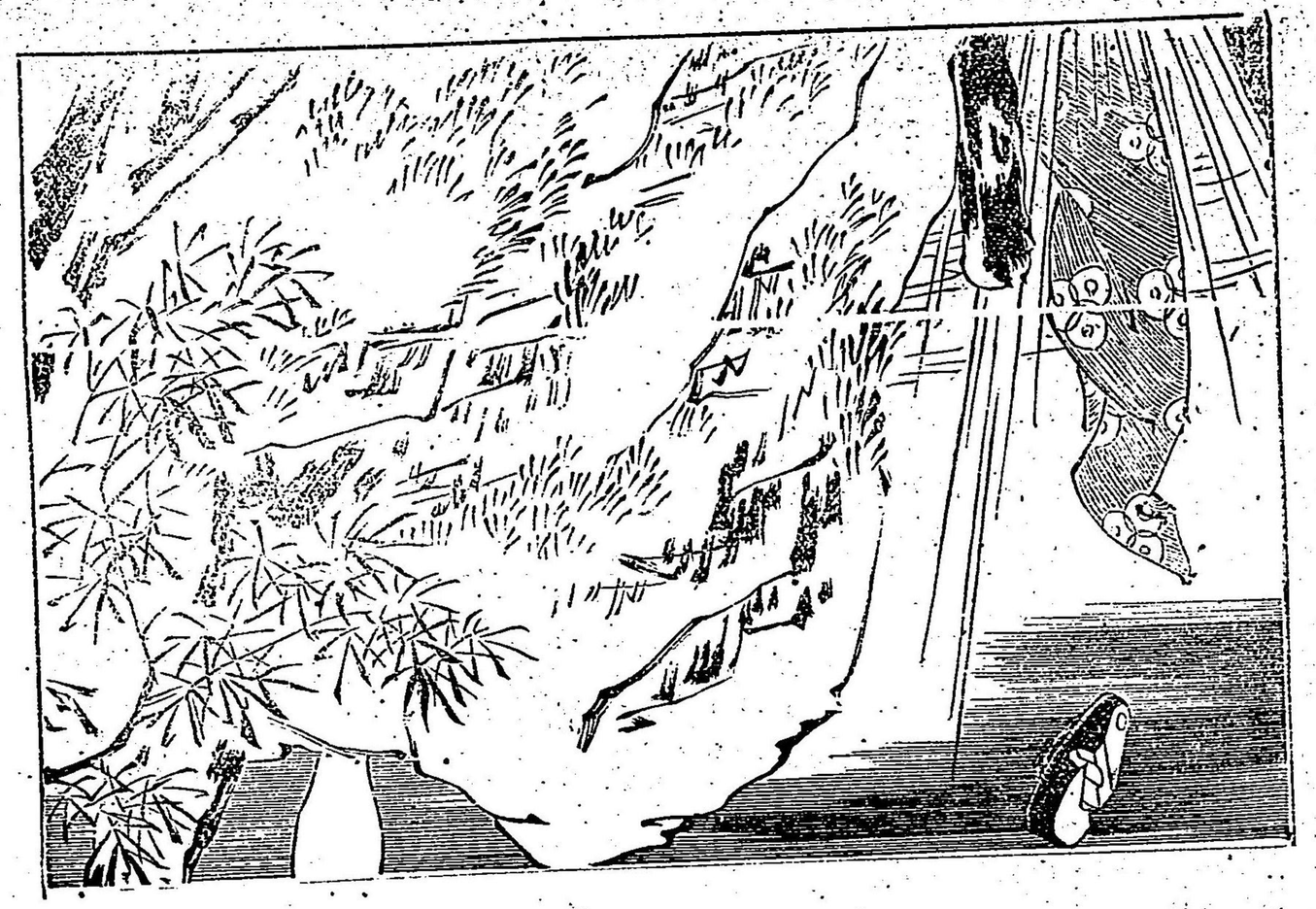
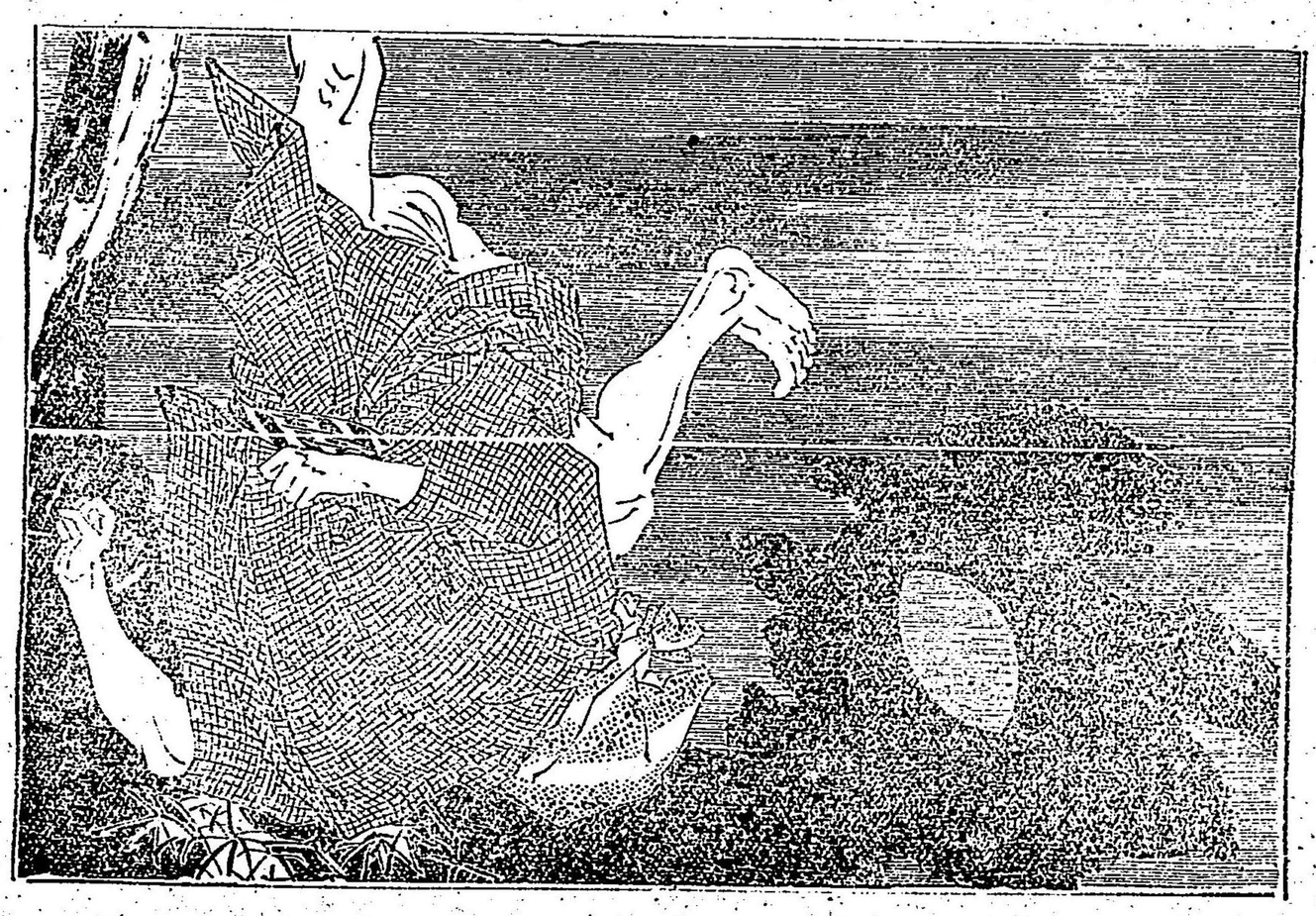
浪華屋様人々に中

六兵衛

讀む毎に胸潰れしが遂にお歌いバッタリ打伏し生体もなく見えにけり

第三十三回

浪華屋の隠居幸兵衛病俄かに危篤ありとて寂より幸吉を歸へ

らしめしゝ彼の物乞ひの老人小初の實父六兵衛が思付たる策略ありと知る、扨小初の藤子をして同樣の迎ひに逢はしめしゝ何者の所爲かと問ふに是ゝ室津一郎と藤子の小鶴が僞りて小初を誘出せるありき車ゝ宙を飛んで若松町に至りしが濵華橋ゝ渡らんともせず轟然柳陰亭の玄關に曳もて行き小初の藤子が怪しみて此處ゝいづくと問ふ中に早出迎へし室津一郎先づとおたへと導けば小初コやゝ其意を解せず茫然として跡に隨ひ二階座敷へ伴はれしが此處にゝ其の藤子坐せり小初ゝ心中驚きあがら殊更何喰はぬ体を粧ひ室津に過る夜の挨拶を述べ今宵ゝ隱居幸兵衛が病氣危篤の知らせにより本店へ立歸ると言へば室津笑ふて小初よ向ひ幸兵衛どのゝ病氣とゝ我等二人の拵らへ事實ゝおん身を此處に迎へ尋ね問ふべき仔細あり

所ゝ餘の儀にもあらず此のみの一條ありと前の密書を投出せば小初いよゝ打驚ろきそも如何ぞして此のみが室津一郎の手に入りしや不審しき限りあれど兎に角惡事ゝ露顯せりと怖るゝ色をおし匿くし明はに己れの名を記さず御存じよりとしたるを幸ひ他まで此身に覺えあしと辭ひしが所詮逃れ難きを察し圓へ立つと見せ掛け置きそつと此家を逃出したるが今ゝ察へも歸り難く濵華屋へも行き難けれど斯く惡事露顯の上ゝ衆吉が身も氣遣はしく如何ともして同人に逢ひ落附先を打語らはんと思定めて川端づたひ濵華橋へと急ぐ折から忽然として出者顯ゝれ小初の藤子を岸邊より彼の大川へ突落しいづくともなく逃去りし跡ゝ二十日餘りの月の影空しく水に映るのみ小初の藤子ゝ如何ありけん、曾つて人を害せんとせし同じ